平安京左京四条一坊五町跡

2024年1月

京　都　市　文　化　市　民　局

京都市文化財保護課発掘調査報告　2023-1　平安京左京四条一坊五町跡

二〇二四　京都市文化市民局

平安京左京四条一坊五町跡

2024年1月

京　都　市　文　化　市　民　局
文　化　財　保　護　課

例　　言

1　本書は、京都市が中京区壬生坊城町48-6、21-2、87で実施した埋蔵文化財の発掘調査成果の報告である。

2　発掘調査は特定非営利活動法人京都社会福祉推進協議会からの委託により、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が報告書作成までを含めて実施し、株式会社アルケスが調査に係る支援業務を担った。

3　遺跡名・受付番号・調査期間・調査面積・調査体制は下記のとおりである。

遺　跡　名：平安京左京四条一坊五町跡

受 付 番 号：21H694

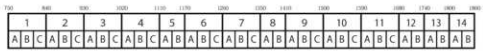
調 査 期 間：2023年2月6日～4月4日

調 査 面 積：310.8㎡

担当調査員：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　新田和央

4　本書に使用した写真の撮影は、横山亮（オフィスメガネ）、九鬼みずほ（Phottery Lab.）に委託し、遺構の一部は調査担当者がおこなった。

5　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年 に準拠する。



6　本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　本書中で使用した方位及び座標の数値は、世界測地系平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。平安京条坊は（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京条坊復元モデル60を用い、同研究所より座標値の提供を受けた。

8　本書で使用した地図は、本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）などを調整したものである。

9　本書の作成及び編集は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　新田がおこなった。

10　本書で報告する調査に係る図面、写真、遺物、日誌などの記録類は京都市が保管している。

（調査地点図）

本 文 目 次

1．調査経過 …… 1
2．位置と環境 …… 2
（1）歴史的環境と立地 …… 2
（2）既往の調査 …… 4
3．遺　構 …… 7
（1）基本層序 …… 7
（2）遺構 …… 9
（3）第２面 …… 10
（4）第１面 …… 20
4．遺　物 …… 22
（1）遺物の概要 …… 22
（2）土器類・石製品・金属製品 …… 22
（3）瓦類 …… 30
（4）木製品 …… 40
5．まとめ …… 44
附章１　平安京左京四条一坊五町出土木材の樹種同定 …… 47
附章２　平安京左京四条一坊五町出土の動物遺体 …… 50

図 版 目 次

図版１　遺構　１　１区第１面全景（西から）
　　２　１区第２面全景（西から）
図版２　遺構　１　２区第１面全景（東から）
　　２　２区第２面全景（東から）
図版３　遺構　１　３区第１面全景（東から）
　　２　３区第２面全景（東から）
図版４　遺構　１　SE25土師器皿出土状況（北東から）
　　２　SE25完掘状況（北から）
　　３　SE25底部曲物内（北から）
　　４　SE25曲物除去後（北から）
図版５　遺構　１　SE101断面（南から）

2　SE101完掘状況（南から）
図版6　遺構　1　SK102南半粘質土検出状況（南西から）
2　SK102半掘断面（南から）
図版7　遺構　1　SE64木枠検出状況及び断面（東から）
2　SE64木枠内須恵器出土状況（南から）
3　SE64木枠内底部断面（東から）
図版8　遺構　1　SE64木枠内完掘状況（南から）
2　SE64木枠内完掘状況（東から）
3　SE64木枠組合わせ部（西から）
図版9　遺構　1　SE64完掘状況（南東から）
2　SE12上部瓦器羽釜出土状況（南西から）
図版10　遺構　1　SE12白色土器高杯脚部出土状況（南西から）
2　SE12完掘状況（北東から）
図版11　遺構　1　SK106底部木材出土状況（北から）
2　SK106底部木材出土状況（南から）
3　SK106完掘状況（北から）
図版12　遺構　1　SD8ウマ歯列出土状況（南から）
2　SD8ウマ歯列出土状況（南から）
3　柱穴列1・2（東から）
4　SP70完掘状況（南から）
図版13　遺物　SK76・SE25・SE101・SK102・SE64出土遺物
図版14　遺物　SE64・SE12出土遺物、調査区内出土瓦
図版15　遺物　調査区内出土木製品

挿　図　目　次

図1　調査位置図（1：5,000）…… 1
図2　調査区配置図（1：800）…… 3
図3　調査前全景（西から）…… 3
図4　1区作業風景（西から）…… 3
図5　3区埋め戻し状況（南西から）…… 3
図6　埋め戻し後（西から）…… 3
図7　周辺調査位置図（1：5,000）…… 4
図8　北・東壁　断面図（1：50）…… 8

図9　調査区グリッド設定図（1：300）…… 9
図10　第2面遺構平面図（1：150）…… 11
図11　SK76・SE25・SE101・SK102実測図（1：40）…… 12
図12　SE64実測図（1：40）…… 13
図13　SE12・SK106実測図（1：40）…… 14
図14　SD8・SX27・SK30実測図（1：50）・ウマ歯列出土状況（1：20）…… 15
図15　柱穴列1・2実測図（1：60）…… 17
図16　SK80・77・78・79実測図（1：40）…… 18
図17　SX103実測図（1：40）…… 19
図18　第1面遺構平面図（1：150）…… 21
図19　出土遺物実測図1（1：4）…… 23
図20　出土遺物実測図2（1：4）…… 25
図21　出土遺物実測図3（1：4）…… 26
図22　出土遺物実測図4（1：4）…… 27
図23　出土遺物実測図5（1：4）・銭貨実測図（1：2）…… 28
図24　出土軒丸瓦実測図（1：4）及び拓影1 …… 30
図25　出土軒丸瓦実測図（1：4）及び拓影2 …… 31
図26　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影1 …… 32
図27　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影2 …… 33
図28　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影3 …… 34
図29　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影4 …… 35
図30　出土丸瓦実測図（1：4）及び拓影1 …… 36
図31　出土丸瓦実測図（1：4）及び拓影2 …… 37
図32　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影1 …… 38
図33　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影2 …… 39
図34　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影3・出土塼実測図（1：4）…… 40
図35　SE64出土井戸枠実測図（1：12）…… 41
図36　SE12出土井戸枠実測図（1：8）…… 42
図37　SE12出土木製品実測図（1：2）・SK106出土木製品実測図（1：8）…… 43
図38　調査10全体図と今回の調査区（1：2,000）…… 45
附章図版1　平安京左京四条一坊五町出土木製品の光学顕微鏡写真 …… 49
附章図版2　壬生坊城町出土の動物遺体 …… 50

表 目 次

表１　周辺調査一覧 …… 6
表２　遺構概要表 …… 9
表３　遺物概要表 …… 22
表４　SK78出土瓦破片数 …… 37
表５　SK106出土瓦破片数 …… 37
附表１　平安京左京四条一坊五町出土木材の樹種同定結果 …… 47
附表２　平安京左京四条一坊五町出土の動物遺体同定結果 …… 50

平安京左京四条一坊五町跡

1．調査経過

調査地は京都市中京区壬生坊城町48-6、21-2、87に所在する。周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡」に該当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京条坊復元モデル60において左京四条一坊五町に比定できる。

当地に特定非営利活動法人京都社会福祉推進協議会による京都社会福祉会館新築工事が計画され、令和４年３月25日に文化財保護法第93条第１項に基づく、「埋蔵文化財発掘の届出」がなされた。この届出を受け、本市文化財保護課は工事による遺跡への影響を確認するための試掘調査が必要と判断し、同年４月４日及び５日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面下0.5ｍで平安時代の遺跡が良好に遺存することを確認し、計画建物の基礎掘削深度が遺構面よりも深く及ぶことが明らかとなった。設計変更等によって遺跡を地中保存することが不可能であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

事業主である特定非営利活動法人京都社会福祉推進協議会は、発掘調査を本市に、その支援業務

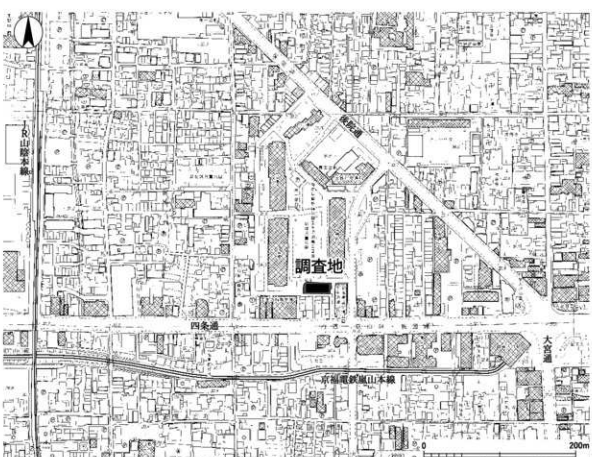


図１　調査位置図（1：5,000）

を株式会社アルケスにそれぞれ委託することとし、三者による契約を令和４年12月16日に締結した。

調査区は東西29.6ｍ、南北10.5ｍで310.8㎡である。調査中の排土を仮置きする空間を確保するため、調査区を３区に分割し、東から順に調査を実施した。東側調査区を１区、中央調査区を２区、西側調査区を３区とした。１区の東端は壬生大路西築地心から約1.7ｍ西に位置し、３区の西端は四行八門制における西三行と西四行の境から約1.5ｍ西となる。調査区中央北寄りに北六門と北七門の境が横断することから、調査区内には西三行北六門、西三行北七門、西四行北六門、西四行北七門の４単位を含むこととなる。

令和５年２月６日に１区の重機掘削を開始し、各区で２面ずつの遺構面を調査、順次２区、３区へと調査区を移した。いずれの調査区でも地表面下約0.6ｍで平安時代後期を中心とした土坑や井戸、柱穴、溝などの遺構を検出した。検出遺構はそれぞれ掘削し、並行して図面作成、写真撮影などの記録作業をおこなった。調査完了後には重機によって排土を埋め戻し、令和５年４月４日には機材類の撤収を含め、現地でのすべての作業を終えた。雨による休工日や休日を含めた調査の延べ日数は58日間である。

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

調査地は平安京左京四条一坊五町の南東部に位置する。平安時代よりも古い遺跡として、北西に弥生から古墳時代の散布地である壬生遺跡、北東に縄文から古墳時代の集落遺跡である堀川御池遺跡、南東に弥生から古墳時代の集落遺跡である烏丸綾小路遺跡をそれぞれ周知している。左京四条一坊域ではこれまでのところ、平安時代よりも古い遺跡は見つかっていない。調査区は一町を東西四行、南北八行に細分する四行八門制において、西三行北六門、西三行北七門、西四行北六門、西四行北七門の４単位にまたがる。

左京四条一坊五町には光孝天皇皇子、是忠親王の御所である「南院」が存在した（『拾芥抄』、『二中歴』）。是忠親王はその居所の名称に由来し、南院親王とも呼ばれる（『日本紀略』延喜20年閏６月９日条）。左京四条一坊にはほかにも居住者の分かる町が複数ある。

二町には11世紀に散位従四位下大江公仲の本邸があったが、公仲は嘉保２年（1095）に強盗・放火・殺人罪で配流となる。その後、12世紀前半に左大弁藤原為隆邸となった。四町は12世紀前半に権中納言源国信の邸宅、六町には平安時代後期に白河法皇近親の内蔵頭藤原国明邸が所在する。八町には平安時代前期に右大臣藤原良相が「延命院」を建立している。これは勧学院の付属施設で藤原一族のための医療福祉施設である。九・十・十五・十六町の四町は『拾芥抄』東京図は「後院」とし、円融天皇離宮の四条後院と推定される。九町には鎌倉時代初期に藤原仲房邸が存在した。十二町は12世紀後半に菅原貞衡の邸宅となっていたが、応保元年（1161）に焼亡、十三町は12世紀前半に中納言藤原家成の邸宅、続いて権大納言中宮大夫藤原隆季邸となったが安元３年

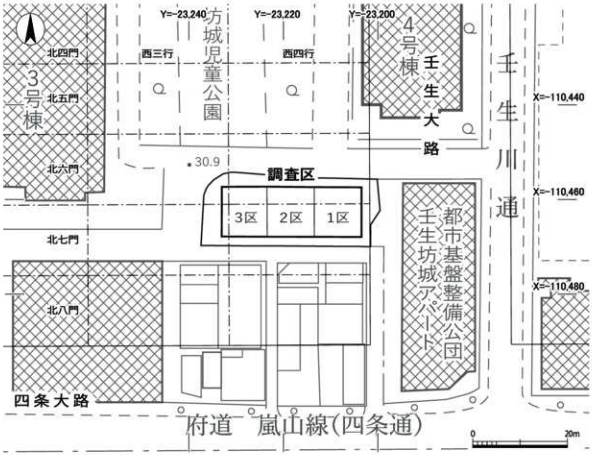


図２　調査区配置図（1：800）

図３　調査前全景（西から）

図４　１区作業風景（西から）

図５　３区埋め戻し状況（南西から）

図６　埋め戻し後（西から）

(1177) に太郎焼亡で焼失した。十四町には平安時代後期に藤原師信、鎌倉時代初期に大納言藤原基家の邸宅があった可能性がある。十五・十六町には10世紀後半に太政大臣藤原頼忠の邸宅四条坊門大宮第があり、のちに四条後院となった。

以上のように平安時代後期の貴族邸宅が複数知られており、次節で挙げるように発掘調査成果からも平安時代後期に土地利用が活発化することが判明している。

また、大正期には京都市電千本線の開業に合わせ、広大な壬生車庫が設置された。これはかつての平安京条坊では左京四条一坊五・六・七・十一町に及ぶものであった。千本三条から四条大宮へと斜めに通る後院通が、碁盤の目状に施工された平安京条坊道路に規制されていないのは、京都市電千本線のために敷設された道路ゆえである。なお、後院通の名称は四条後院に由来する。京都市電廃止後、壬生車庫跡地には日本住宅公団によって壬生坊城第２団地が設置され、現在に至っている。今回の調査地の一部は、かつての壬生車庫の一角にあたる。

（２）既往の調査

平安京左京四条一坊域では、その全体を北西から南東に斜めに２分する後院通の南西側を中心

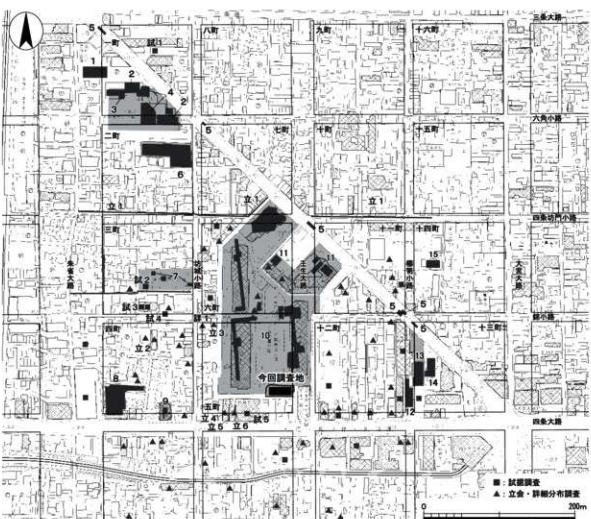


図７　周辺調査位置図（１：5,000）

に、比較的多くの発掘調査を実施してきた。図７に調査地点を示し、調査内容を表１にまとめた（発掘調査については図・表とも「発掘調査」を省略。また本文中では「調査」とのみ表記）。図中の調査番号は表１に一致する。試掘調査及び立会調査、詳細分布調査の事例にも事欠かないが、紙幅の都合上全事例には触れず、同町域の事例及び顕著な調査成果を得たもののみを表に示し、上記以外に隣接八町（四条一坊三・四・六・十一・十二町及び五条一坊一・八・九町）での事例は図中に記号で地点を示した。

平安時代よりも古い遺構は流路を除いて検出していないが、調査６・10・11では平安時代の遺物包含層から弥生～古墳時代の遺物が出土しており、調査14ではチャート製の石鏃が出土している。未発見ではあるが、近辺に弥生時代・古墳時代の集落があった可能性がある。

平安時代前期の遺構としては、調査１で朱雀大路の東側溝を検出している。この側溝から出土した遺物は９世紀から15世紀までの幅があり、長期にわたって機能したことが分かる。調査５では六角小路の築地や側溝を検出しており、一帯に条坊が施工されていたことが分かっている。また調査13・14及び試掘１では平安時代前期の池を検出、調査６では平安時代前期の掘立柱建物を検出しており、宅地内も整備が進んでいたことが明らかである。平安時代中期には、調査７で建物や整地層を、調査８で井戸を、試掘４で池を検出しているが、全体としては前代に比して希薄になる。平安時代後期になると遺構が急増する。調査６では平安時代後期の池とそれを取り巻く建物跡や溝跡などが見つかっている。

調査12や調査14では室町時代の堀を検出しており、これを下京の町が外周に築いた防御施設と捉えれば、この時期には下京の町の西端部に位置することとなる。

従来から、左京四条一坊一帯は平安時代中期にいったん土地利用が低調となるが、平安時代後期に再開発され、遺構・遺物が急増することが判明している。発掘調査、試掘調査、立会・詳細分布調査のいずれにおいても、その傾向はおおむね一致している。

今回の調査地は調査10と距離的関連性が強いが、いずれもかつては京都市電千生車庫の一角であった。調査10は平安時代前期の土坑や井戸、道路側溝を検出したほか、平安時代後期の井戸から「寛治５年」（1091）墨書銘のある須恵器鉢が出土し、平安京域における土器編年の一定点である。また、平安京跡の発掘調査史における初期の大規模調査として、その後の調査に与えた影響は大きい。調査10の南半は今回の調査地と同じ左京四条一坊五町に当たり、同調査の成果と対照し、再定置することも重要となる。

表1　周辺調査一覧

	条坊町	調査概要	文献
1	左京四条一坊一町・朱雀大路	朱雀大路東側溝。	『平安京左京四条一坊一町－壬生朱雀町の調査－』古代文化調査会、2020 年
2	左京四条一坊一町	平安時代の池など。	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1982 年
3	左京四条一坊一町	平安時代の池。中世の溝。	「平安京左京四条一坊」『昭和 62 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1991 年
4	左京四条一坊一・二町	平安時代前～中期の六角小路南築地地下暗渠・北側溝・北築地内溝、井戸、池など。平安時代後期の六角小路路面・北築地・北側溝・南側溝、井戸、溝、瓦溜など。遺物：「朱雀院」墨書の題箋など。	「平安京左京四条一坊」『平成 4 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995 年
5	左京四条一坊一・七・十一・十三町	平安時代後期から鎌倉時代の壬生大路東側溝及び櫛笥小路東側溝。室町時代の溝、湿地。江戸時代の井戸、溝、土坑、落込み。	『平安京左京四条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-1、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2021 年
6	左京四条一坊二町	平安時代前期の掘立柱建物、溝、水場、井戸、土坑、ピット、落込み。中期の溝、井戸、桝状遺構。後期の礎石建物、石組溝、棚、築地、入江、岬、瀬落しなど。	『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-10、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2015 年
7	左京四条一坊三町	平安時代中期の建物、溝、土坑、落込み、整地層。平安時代後期の坊城小路西築地内溝、溝、土坑、柱穴、整地層。	『平安京左京四条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-3、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2022 年
8	左京四条一坊四町	平安時代前期の井戸。後期の四条大路北側溝、朱雀大路東築地内溝。	『平安京跡（左京四条一坊）発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書 3、西近畿文化財調査研究所、2001 年
9	左京四条一坊四町	平安時代前期の井戸。後期の溝、井戸、土坑、柱穴。磁州窯壺片。	「左京四条一坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和 58 年度』京都市文化観光局、1984 年
10	左京四条一坊五・六・七町	平安時代前期の井戸、土坑。中期の井戸。後期の掘立柱建物。平安～鎌倉時代の四条坊門小路路面・側溝。中世の掘立柱建物。遺物：弥生・古墳時代の土器、平安時代の墨書土器など。	『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』平安京調査会、1975 年
11	左京四条一坊六・十一町	平安時代後期から鎌倉時代の溝、井戸、土坑など。	「平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路」『京都府遺跡調査報告集』第 142 冊、（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、2011 年
12	左京四条一坊十二・十三町	平安時代以前の旧流路。火山灰堆積。平安時代前期の湿地状堆積。室町時代後期の土坑、堀、溝など。	『平安京左京四条一坊十二・十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-33、（財）京都市埋蔵文化財研究所、2007 年
13	左京四条一坊十三町	平安時代前～中期の池。後期の井戸。中世の井戸、溝、土坑など。近世の土坑など。	『平安京左京四条一坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2006 年
14	左京四条一坊十三町	平安時代前期の池。後期の井戸。室町時代の堀。「大伴」銘軒平瓦。	『平安京左京四条一坊十三町－壬生坊城町の調査－』古代文化調査会、2011 年
15	左京四条一坊十四町	鎌倉時代の土坑。室町時代の井戸。近世の井戸・土坑・土取穴。	『平安京左京四条一坊十四町』『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2011 年

	条坊町	調査概要	文献
試 1	左京四条一坊一町	平安時代前期の池跡。	「平安京左京四条一坊一町跡 No.4」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 20 年度』京都市文化市民局、2009 年
試 2	左京四条一坊三町	平安時代前期・中～後期の整地層、坊城小路西築地内溝。	「平安京左京四条一坊三町跡 No.42」『京都市内遺跡試掘調査報告　令和 2 年度』京都市文化市民局、2021 年
試 3	左京四条一坊三町	平安時代中期の整地層とそれ以前の池状堆積。	「平安京左京四条一坊三町跡 No.12」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 6 年度』京都市文化市民局、1995 年
試 4	左京四条一坊三町	9 世紀後半の池跡と 12 世紀の錦小路北側溝。	「平安京左京四条一坊三町跡 No.24」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 15 年度』京都市文化市民局、2004 年
試 5	左京四条一坊五町	GL-0.84 m の地山上面で平安時代の東西溝を確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 3 年度』京都市文化観光局、1992 年
立 1	左京四条一坊二・七・十・十五町	四条坊門小路北側溝を確認。	「左京四条一坊」『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1984 年
立 2	左京四条一坊四町	平安時代後期～鎌倉時代の池・洲浜。銭貨入り壺。	「平安京左京四条一坊四町（05HL167）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成 17 年度』京都市文化市民局、2006 年
立 3	左京四条一坊五町	1980 年立会	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1982 年
立 4	左京四条一坊五町	検出できず。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局、1990 年
立 5	左京四条一坊五町	盛土のみ。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 59 年度』京都市文化観光局、1985 年
立 6	左京四条一坊五町	平安後期包含層・土坑、時期不明包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 58 年度』京都市文化観光局、1984 年
詳 1	左京四条一坊五町	江戸時代包含層、時期不明包含層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成 24 年度』京都市文化市民局、2013 年

3．遺　構

（1）基本層序（図8）

調査地の現地表面はおおむね平坦で、標高は約31.0～31.1 mである。近現代の盛土が調査区北側で0.3～0.4 m程度、調査区南側で0.6 m程度堆積する。南北で盛土厚が異なるのは、調査区内のX=-110,459ライン付近で北から南に一段落ちる段差があるためである。段差の上段、下段にかかわらず、遺構面直上まで近現代盛土が堆積していることから、南北両側で近代に遺構面が削平され、かつ南側でより深くまで削平されたことで、この段差が生じたと考える。段差北側では一部に黄灰色砂泥及びにぶい黄褐色砂泥からシルトの整地層が堆積していた。現代盛土ないし整地層直下で基盤層となる。基盤層はにぶい黄橙色シルトを基調としつつ、還元状態によるグライ化箇所が多く、調査区西側の一部ではこぶし大の礫を多く含んでいた。

整地層が残る調査区北側では整地層上面を第1面、地山上面を第2面とし、整地層を検出しなかった調査区南側では、平面プランが不定形なものや遺構理土の性質から相対的に新しい遺構であると判断したものを第1面、それ以外の遺構を第2面として掘削をおこなった。また、調査区東端の壬生大路西築地内溝検出部付近では、内溝検出範囲の下面に整地層が広がっていた。この整地層分布範囲については第2面の調査後にさらに基盤層上面の調査を実施した。これを便宜的に第2.5面として取り扱ったが、報告図面上は第2面に統合した。

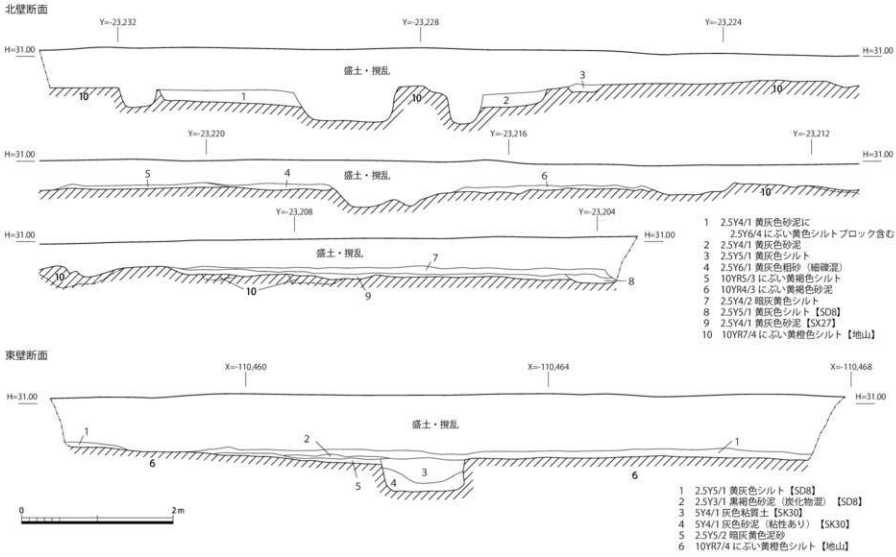


図8　北・東壁　断面図（1：50）

（2）遺　構

調査区で検出した遺構は、平安時代前期の土坑、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、井戸、溝、柱穴列、江戸時代の不定形土坑、近代の土坑などである。

調査区には遺物の取り上げや検出遺構の位置管理のため、４m四方のグリッドを設定した（図９）。東西方向に西からアルファベットでＡからＩ、南北方向に北からアラビア数字で１～４を付し、両者の組み合わせによって各グリッドを呼称している。なお、遺構は検出順に番号を振ったが、掘削の結果、遺構としての認識を改めたものや、２つ以上の遺構がひとつの遺構にまとまったものがある。そういった場合でも、以降に検出した遺構について番号を繰り上げることはしていないため、遺構番号の最大の数値と検出遺構数は一致しない。

以下、主要な遺構について遺物内容及び検出状況等から推定できる埋没年代ごとに、古い順にその概要を記す。

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	SK76、SE25・101、SK102、SE64・12	
鎌倉～室町時代	SK106、SD8、SX27、SK30、柱穴列１・２、SK79・80・83・44	
江戸時代以降	SK78・63、SX103、SK65・34・89、SD43・48・50・54・57	

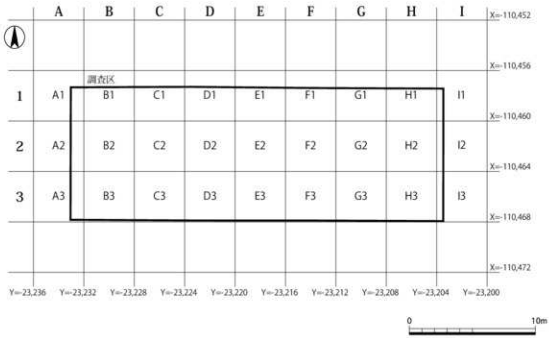


図９　調査区グリッド設定図（１：300）

（3）第２面

平安時代前期

SK76（図11） 今回の調査で検出した最も古い遺構である。調査区南西部Ｄ３グリッドに位置する。東西0.85ｍ、南北0.9ｍの方形を呈し、検出面からの深さは0.78ｍである。埋土は３層に分層でき、第１層が中央部分に平面円形に堆積していたことから、検出時点では柱穴の可能性が高いと考えた。しかし、第１層は検出レベルから0.17ｍまでで途切れる一方で遺構そのものは約0.75ｍの深さであるために、柱当たりとは考えにくいこと、東西南北いずれの方向でも、これと組み合う柱穴が確認できなかったことなどから、方形土坑であると認識した。埋土からは平安時代前期、1C段階の土師器や須恵器、黒色土器が出土している。

平安時代中期・後期

SE25（図11） 調査区東側北寄りのF1・F2グリッドで検出した井戸である。平面形は東西1.35ｍ、南北1.65ｍのややいびつな楕円形で、底部には曲物を据えていた。曲物は掘方の東側に偏っていた。当初、南北方向中心軸で堆積状況を確認したが、上記の通り曲物が東に寄っていたため、底部のみ軸をずらして断面を取り直している。検出面から底までの深さは1.1ｍである。曲物の直上0.3ｍで４C段階ごろの完形の土師器皿が２点出土した（図19-16・17）。なお、曲物は非常に脆く、取り上げの際に形を保つことができなかった。

SE101（図11） 調査区西寄り中央部のC2・C3・D2・D3グリッドで検出した井戸である。平面形は１辺1.35～1.4ｍの隅丸方形を呈し、井戸枠は掘方の北西側にやや寄っている。検出面から底部までの深さは約1.4ｍである。検出面で枠内と掘方の土質の違いを確認できたが、掘削の結果、木や石などによる井戸枠は確認できなかった。底部付近の４層内部とその周囲にはやや大きい礫が集中していた。埋土からは土師器や緑釉陶器など、4C段階の遺物が出土した。

SK102（図11） 調査区西側のC2グリッドで検出した土坑で、南北1.9ｍ、東西1.5ｍの方形を呈する。深さは約0.5ｍで、上層は黄灰色砂泥で埋まるが、下層には薄く灰色粘質土（３層）が堆積しており、滞水していたことが推測できる。遺構底面は湧水層まで達していないと思われるため、井戸とは考え難く、性格は不詳とせざるを得ない。実測に耐える大きさの遺物はなかったため図示できないものの、土師器皿AやN、陶器、白磁などで、4C～５段階の資料を含む。

SE64（図12） 調査区北側C1・D1グリッドで検出した大型の井戸である。検出時点での掘方は東西2.7ｍ、南北2.4ｍである。検出面から底までの深さは約2.0ｍであり、４層から下部で粘性があり、グライ化した土が堆積していた。井戸枠は底部からおよそ0.6ｍ分残っていた（図35-木１・２）。半截した丸太材の内側をくりぬいたものを２つ組み合わせたものであり、平安時代後期の京都近辺ではあまり類例をみない。検出時点で組み合わせ部分には少し隙間があった。土圧によって内側へと押し出されて生じたものか。底部には曲げ物等の痕跡は認められなかった。井戸枠遺存部の上部からは東播系須恵器甕の上半部が出土した（図20-57）。ほかに５段階から6A段階ごろまで

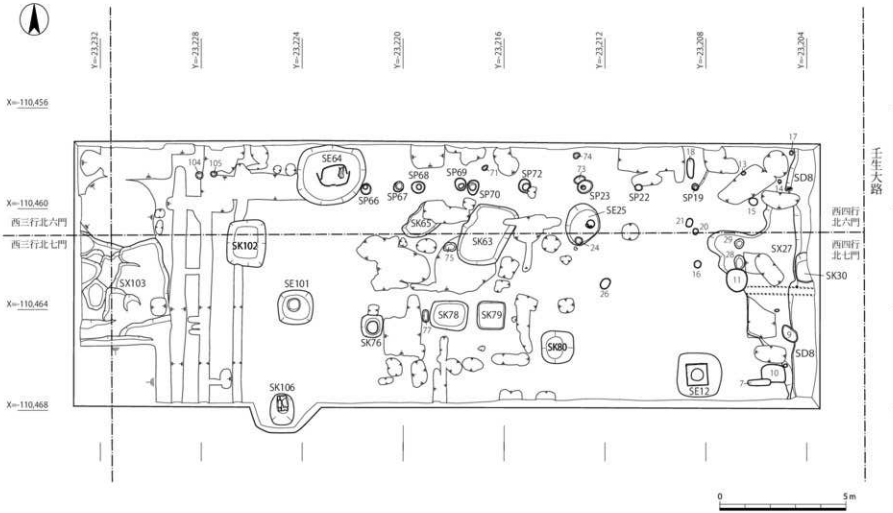


図10　第２面遺構平面図（１：150）

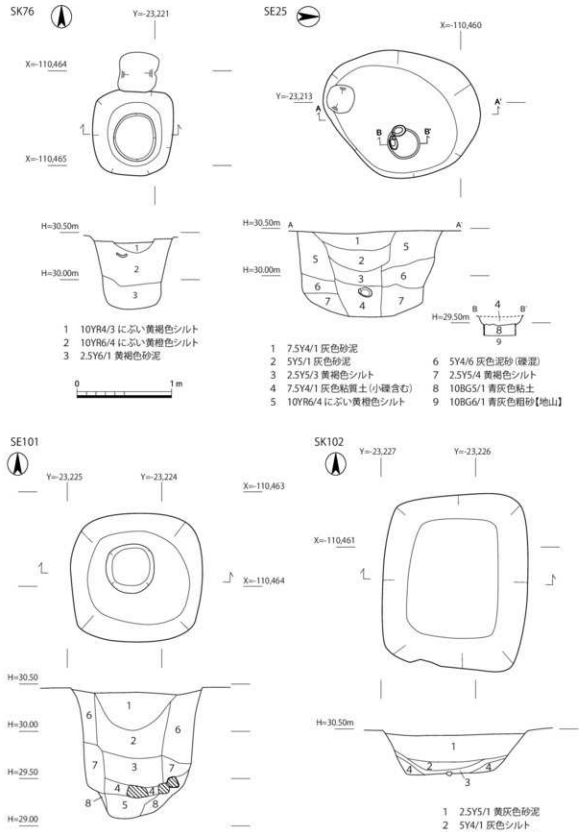


図11　SK76・SE25・SE101・SK102実測図（1：40）

の遺物群が出土している。

SE12（図13） 調査区南東部のG3・H3グリッドで検出した井戸である。東西1.75ｍ、南北1.75ｍの方形を呈する。検出面から底までの深さは1.65ｍである。底部には木組みの方形井戸枠が据えられていた。さらにその内部が円形に窪み、木質が残存していたため、本来は曲げ物が据えられていたと見えるが、形を保った状態ではなかった。埋土からは５段階の遺物が出土したが、土師器は細片のものばかりで時期の絞り込みが難しい。最上部には焼土と炭が土坑状に堆積しており、出土遺物は6A段階ごろのものである。ここから出土した瓦器三足付羽釜に焼土が付着した状態で出土している。井戸が埋没する最終段階で焼土や炭が発生する行為をおこなった可能性がある。

鎌倉・室町時代

SK106（図13） 調査区西側南端のC3グリッドで検出した土坑である。南側が調査区外となるため、

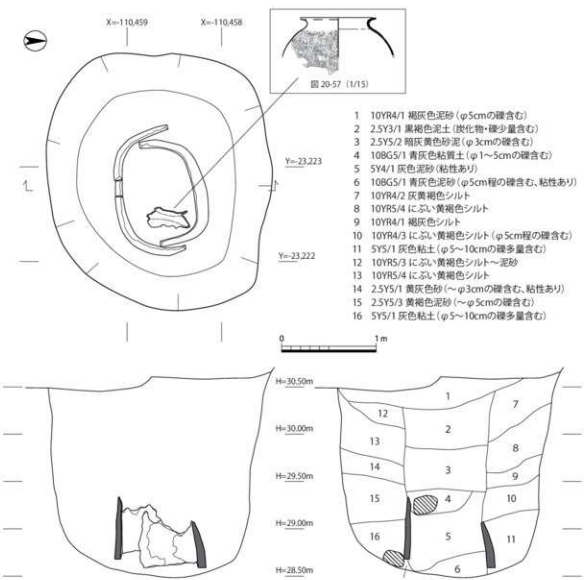


図12 SE64実測図（1：40）

調査の最終段階で拡張し、全形を確認した。東西0.95ｍ、南北1.25ｍで、検出面からの深さは約1.0ｍである。４層に分層できるうち、１層には焼土が堆積し、３層から多量の瓦が出土した。４層は青灰色粘土で、ここに４枚の板材が据えられていた。板材の機能は不明であるが、一部の板材には小口に突起、凹みを設けていた。出土した土師器皿は平安時代末の様相を呈し、瓦の年代も平安時代末から鎌倉時代初頭に集中することから、13世紀に埋没した遺構であろう。

SD8（図14）　調査区東端で検出した南北溝である。西肩はY=-23204.5付近で調査区内ではほぼ正南北、東肩は調査区外となるが、北壁では底部の東側が立ち上がり始めていることが観察できるた

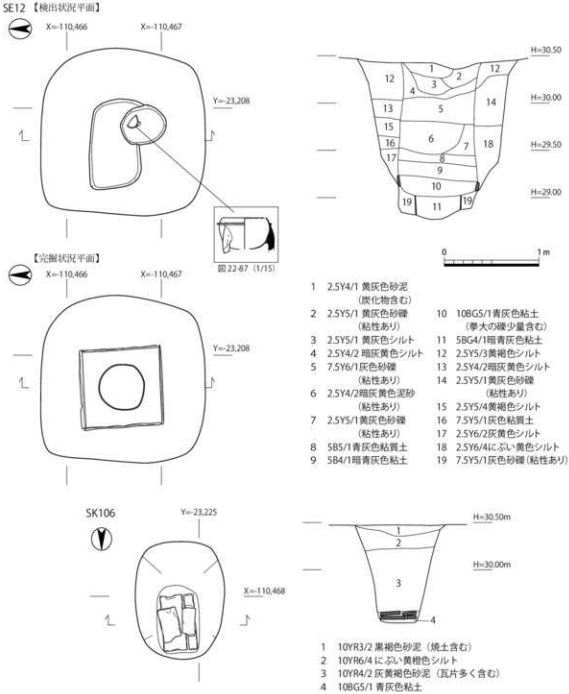


図13　SE12・SK106実測図（１：40）

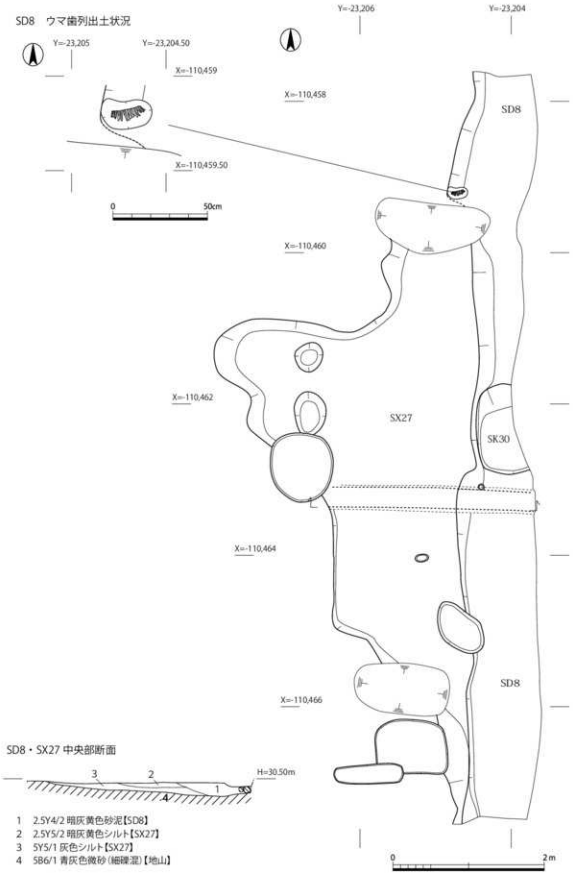


図14　SD8・SX27・SK30実測図（1：50）・ウマ歯列出土状況（1：20）

め、幅は1.5ｍ弱になるものと推定する。なお、西肩はX=-110,460からX=-110,463付近で東にずれ込んでいたが、同範囲の東壁で解体建物の基礎が遺存しており、その施工の際に影響を受けたことによる可能性が高い。西肩ラインは壬生大路西築地心推定線から約2.8ｍ西に位置するため、壬生大路西築地内溝である可能性が高い。調査10では壬生大路西側溝を検出している（ただし出土遺物は戦国時代）が、図面や報告文中の記載を見る限り内溝は検出されていない。埋土からは６～７段階の遺物が出土した。また、北側ではウマの歯が遺構底部に張り付いた状況で出土している。

SX27（図14） SD8の西側に広がる整地土であり、暗灰黄色シルト及び灰色シルトからなる。西に向けて浅くなっていき、GグリッドとHグリッドの境付近でなくなる。土師器皿NやS、白磁など５～６段階の遺物が出土している。

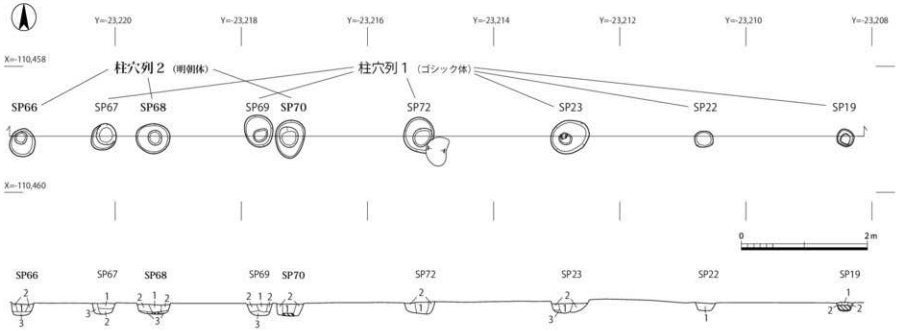
SK30(図14） 調査区東端中央、H2・I2グリッドで検出した方形の土坑である。SD8の埋土に覆われており、SD8成立以前に掘られたものである。調査区外東側まで続き、全体は不明だが、南北1.2ｍ、東西0.7ｍ以上の規模である。埋土は灰色粘質土から粘性のある砂泥（図８東壁３・４層）で、深度は0.45ｍ程度であった。土師器皿や灰釉系陶器、常滑焼、白磁、青磁などが出土した。13世紀の遺構である。

柱穴列１（図15） 調査区北側の段差付近で東西方向に並ぶ柱穴列である。東からSP19・22・23・72・69・67で構成され、各柱穴間は2.2～2.3ｍを測る。各柱穴の柱当たりには焼土を含み、SP19は底部に石を据えている。南側には展開しないが、調査区北端まで1.7ｍであるため、調査区内北側に１間分の余地はなく、北側に続く建物の南柱穴列であった可能性がある。各柱穴からは土師器皿片が出土したが、皿Sは含まれず、皿Nのみである。また、SP23からは軒丸瓦の瓦当部が柱当たりの壁面に張り付くような状態で出土した。瓦は平安時代後期の宝相華文軒丸瓦である（図24-瓦１）。重複する位置にある柱穴列２の出土遺物も鑑み、廃絶は12世紀末から13世紀初頭とみたい。

柱穴列２（図15） 柱穴列１とほぼ重複する位置に並ぶ柱穴群であり、東からSP70・68・66で構成され、各柱穴間は2.1ｍを測る。柱間から柱穴列１と区分した。柱穴列１と同様に南側には展開しておらず、調査区北端まで1.7ｍであるため、調査区内北側には１間分の余地はなく、北側に続く建物の南柱穴列であった可能性がある。埋土には柱穴列１同様に焼土を含み、SP70には底部に粘土塊のようなものが敷かれていた。柱穴列２の各柱穴からは土師器皿N片に加え、皿Sが出土している。柱穴列１の各柱穴との間に切り合い関係はないが、出土遺物の様相差から柱穴２が相対的に新しいと判断できる。土師器皿Sが出土していることから6B段階以降の13世紀に位置付けられる。

SK80（図16） 調査区中央部、F3グリッドに位置する土坑で、１辺1.3ｍ弱の方形を呈する。東辺の立ち上がりはやや緩く、深さは0.55ｍで下層ほど粘質が強くなる。出土遺物の下限は14世紀である。

SK79（図16） 調査区中央のE2・E3グリッドで検出した土坑で、１辺1.1ｍのほぼ正方形を呈する。埋土は青灰色砂泥の単層で、深さは0.4ｍ弱である。土師器皿N片、常滑焼、灰釉系陶器、青



【SP66】
1　2.5Y4/2暗灰黄色
　泥砂（焼土含む）
2　2.5Y5/3黄褐色砂泥
3　2.5Y5/1黄灰色シルト

【SP68】
1　2.5Y4/2暗灰黄色
　砂泥（焼土含む）
2　2.5Y5/3黄褐色シルト
3　5Y5/1灰色シルト

【SP69】
1　2.5Y4/2暗灰黄色
　シルト（焼土含む）
2　2.5Y6/3にぶい
　黄色シルト
3　5Y5/1灰色シルト

【SP72】
1　2.5Y4/1黄灰色
　シルト（焼土含む）
2　2.5Y4/3オリーブ
　褐色シルト

【SP23】
1　2.5Y4/1黄灰色
　シルト（焼土含む）
2　2.5Y6/3にぶい
　黄色シルト
3　5Y6/1灰色シルト

【SP22】
1　2.5Y4/1黄灰色
　シルト（焼土含む）

【SP19】
1　10YR6/4にぶい
　黄橙色シルト
2　10YR5/1褐灰色
　砂泥（焼土含む）

【SP67】
1　10YR3/2黒褐色
　砂泥（焼土含む）
2　2.5Y4/1黄灰色微砂
3　2.5Y5/3黄褐色砂泥

【SP70】
1　10YR4/1褐灰色
　砂泥（焼土含む）
2　2.5Y5/4黄褐色シルト
　（2.5Y4/2暗灰黄色
　シルト少量含む）

図15　柱穴列１・２実測図（１：60）

磁などが出土しているが、遺構の時期を絞るには質・量ともに不足している。

江戸時代以降

SK78（図16） 調査区中央のE2・E3グリッドで検出した土坑で、南北1.2m、東西1.5mの方形を呈する。深さは0.75mで、埋土は4層に分かれ、下層の土は粘質で、下層は袋状にふくらむ。ふくらんでいる部分は地山がシルト質から砂質に変化していることから、掘削に伴い砂が崩れた結果であろう。文様や製作技法が近似する13世紀前半の瓦が多量に出土したが、8段階ごろの土師器皿Shや青磁、近世の端反磁器片が出土している。遺構そのものの成立は近世で、埋まる過程で近辺にあった13世紀の瓦が入れられたのであろう。

SK63（図10） 調査区中央のE1・E2・F1・F2グリッドで検出した土坑である。南北2.5m、東西1.9mの隅丸方形を呈する。浅い皿状の断面を呈し、深さは検出面から約0.2mで灰色砂泥を埋土とし、両端のみにぶい黄色シルトが堆積する。江戸時代後半に属する端反の染付が出土した。

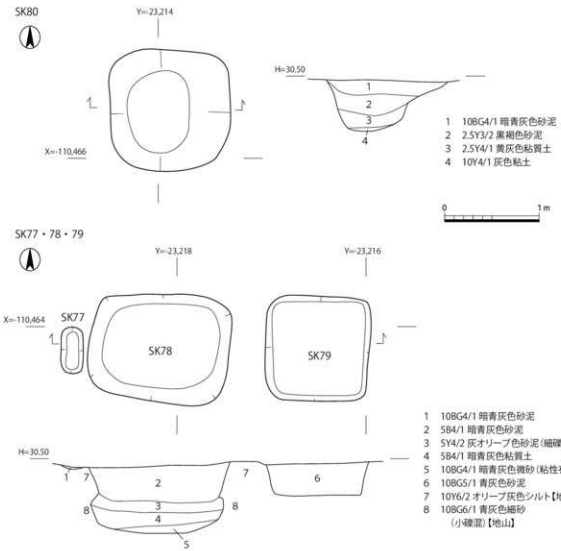


図16 SK80・77・78・79実測図（1：40）

SX103（図17） 調査区西端中央で検出した土坑群である。上端は明瞭ではなく、底面も起伏があり、個々の土坑の単位は断面観察においても判然としない。北側のSK89（第1面）と合わせ、土取穴の可能性が高い。埋土からは江戸時代の土師器皿Nrや肥前産施釉陶器の椀のほか、南北朝から室町時代の土師器皿、軒丸瓦などの遺物が出土している。土取りは江戸時代におこなわれたものであろう。

SK65（図10） 調査区中央のE1・E2グリッドで検出した不定形の土坑である。深さは0.1m強で浅い皿形の断面形状を呈する。江戸時代の施釉陶器のほか、近代のものと思しき染付が出土している。

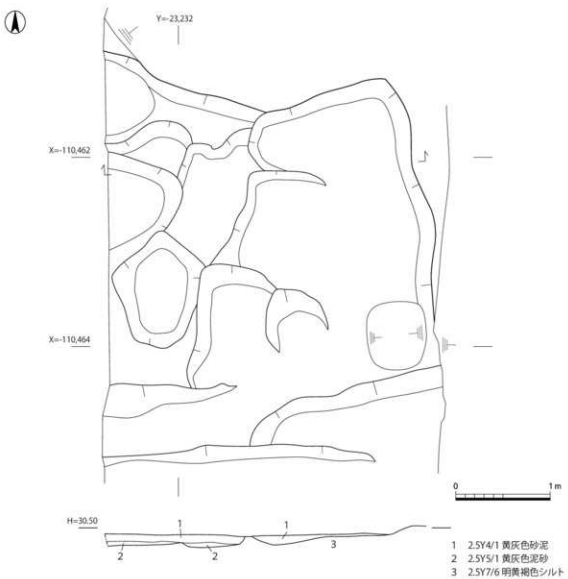


図17 SX103実測図（1：40）

（4）第1面

鎌倉・室町時代

SK83（図18） 調査区北西隅で検出した方形の土坑である。東西2.7ｍ、南北1.2ｍ以上で、北側は調査区外となる。検出面からの深度は0.2ｍである。6段階ごろの土師器皿Nや青磁片が出土し、確実に近世まで下る遺物は出土していない。

SK44（図18） 調査区中央部で検出した不定形土坑である。東西2.0ｍ、南北1.5ｍ程度で、遺構深度は0.1ｍ強と浅く、底面には凹凸がある。遺物には12世紀の土師器や白磁、15世紀ごろの土師器や常滑焼片が含まれており、相対的な量としては12世紀の遺物が多い。ただし土取穴等の可能性もあり、遺物が含まれないが江戸時代以降の遺構である可能性も排除しきれない。

江戸時代以降

SK34（図18） 調査区中央部で検出した不整形の土坑である。南北2.3ｍ、東西2.4ｍの浅い皿型である。出土遺物は鎌倉から室町時代の土器・陶磁器の比率が高いが、染付片と思われる磁器の破片が出土しており、江戸時代の遺構であると判断している。

SK82（図18） 調査区北西部A1グリッドで検出した土坑である。南北1.0m、東西0.8mの楕円形で、検出面から掘削底までおおよそ20cm、埋土からは緑釉陶器や輸入陶磁器の白磁、剣頭文軒平瓦、巴文軒丸瓦などが出土した。大半は6段階以前の遺物だが、近世と思しき施釉陶器が出土していることから、遺構の埋没は近世であると判断できる。

SK89(図18） 調査区北西部、A1・2、B1・2グリッドで検出した土坑である。底部は凹凸があり、南側に隣接するSX103とともに土取穴であった可能性があるが、決め手には欠ける。土師器皿Nの小片と須恵器片がそれぞれ1片ずつ出土したが、遺構の時期を決めるには材料不足と言わざるを得ない。ただしSX103と同時期であれば、江戸時代をさかのぼるものではない。

SD43・48・50・54・57（図18） 調査区各所で検出した溝で、ごく浅い。遺物は細片だが、江戸時代以降に下るものであり、耕作に伴う溝であると推定している。SD43は北側の段差と並行しており、段差形成時に一体的に掘削されたものの可能性もある。

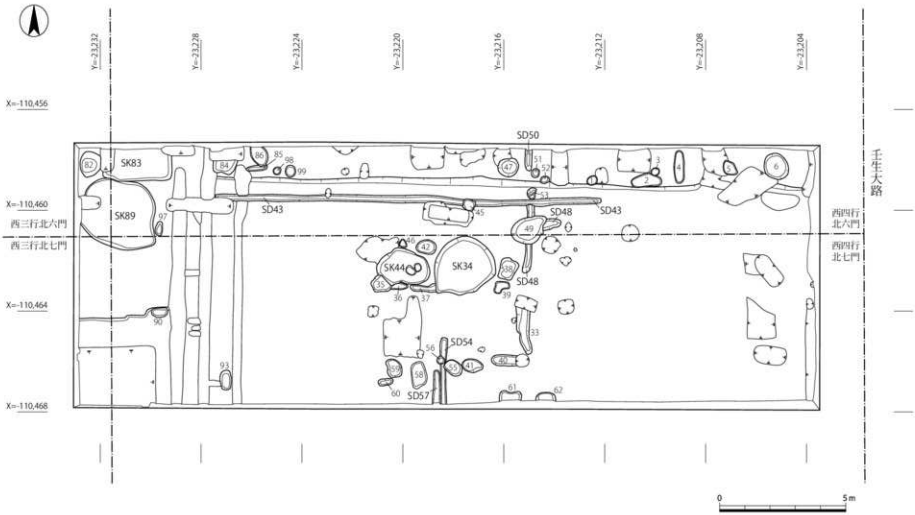


図18　第1面遺構平面図（1：150）

4．遺　物

（1）遺物の概要

遺物は整理コンテナに換算して43箱出土した。このうち、土器・陶磁器・瓦などは20箱分である。なお、コンテナに収まらない大きさの木製の井戸枠などは法量からコンテナ箱数に換算して23箱分としている。出土遺物には土器・陶磁器類、瓦類、土製品、石製品、木製品、銭貨などがある。以下、３章で記した順に遺構ごとの遺物の概要を記す。

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期以前	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、石製品		土師器４点、黒色土器１点、須恵器４点、緑釉陶器１点、石製品１点		
平安時代中～後期	土師器、須恵器、白色土器、緑釉陶器、白磁、木製品		土師器22点、須恵器１点、白色土器１点、緑釉陶器１点、白磁８点、木製品５点		
平安時代末期～鎌倉時代	土師器、須恵器、白色土器、瓦器、灰釉系陶器、焼締陶器、白磁、青磁、青白磁、輸入陶器、土製品、石製品、瓦類、木製品		土師器26点、須恵器４点、白色土器３点、瓦器４点、灰釉系陶器７点、焼締陶器１点、白磁14点、青磁２点、青白磁２点、輸入陶器３点、土製品１点、石製品２点、軒丸瓦８点、軒平瓦12点、丸瓦５点、平瓦７点、塼１点、木製品６点		
室町時代～江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、金属製品、瓦類		土師器３点、施釉陶器３点、磁器１点、金属製品１点		
合　計		49箱	165点（29箱）	2箱	18箱

※コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より６箱多くなっている。

（2）土器類・石製品・金属製品

SK76　１～４は土師器である。１は杯Aeで、復元口径が13.7cmである。２～４は土師器椀Acで、外面はケズリ調整、口径は13.8～16.5cmである。５は黒色土器A類椀である。口径17.5cm、器高4.9cmである。内外両面を密に磨き、外面底部はヘラケズリである。６は須恵器蓋で、ツマミ部分は欠損し、端部は屈曲させる。７・８は須恵器杯Aである。７は口径14.3cm、器高4.5cmで、体部は回転ナデ調整、底部の切り離しはヘラ切りである。８は底部のみ遺存し、ヘラ切り調整である。９は須恵器小壺である。底部は回転糸切り後無調整とする。全体として1C段階に属する資料群である。同時期の遺構は今回の調査区内では確認していない。

SE25　10～17は土師器である。10・11は皿Aである。いずれも反転復元しており、口径の値は信頼性に欠けるが、9.0cm及び10.0cmである。12～14は皿Nの口縁端部破片で、口径復元は難しいが、外反する特徴が表れている。15は皿Nの小皿で、復元口径が10.8cm、底部は丸みを帯びる

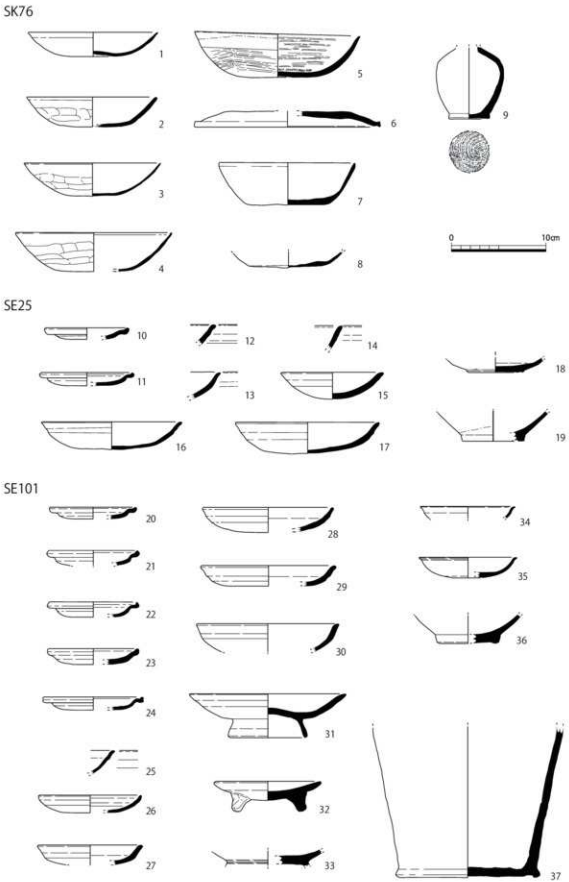


図19　出土遺物実測図１（１：４）

が、反転復元のため、本来の形状とは異なる可能性もある。16と17はほぼ完形で出土しており、口径は14.9cmと15.2cmである。18・19は白磁である。18は皿である。高台は外周の3mmほど内側に沈線を巡らせ、見込みには段差を有する。19は椀で、低いケズリ出しの高台から直線的に体部が伸びる。総体として4C段階ごろの資料群であろう。

SE101　20～24は土師器皿Aである。いずれも反転復元で、口径は9.1～10.7cmである。厚手で口縁端部の屈曲は緩やかである。25～30は土師器皿Nである。25は口縁部破片で口径復元は難しい。26・27は10.9cmと11.1cmの小皿、28～30は13.9～15.0cmの大皿である。口縁端部は緩やかに外反しているものが多い。31は土師器の高台付皿で、口径は16.7cmである。皿部は皿Nの特徴を有するが、通常の皿Nと比べて開きが大きい。32は白色土器の三足盤である。口径11.4cmの回転台成形で、脚部は貼り付ける。33は緑釉陶器の皿ないし椀で、高台は貼り付け、釉薬は濃緑色、胎土はにぶい橙色である。34・35は白磁皿で、復元口径10.0cm及び10.5cm、口縁端部は外反する。36は白磁椀で、遺存範囲の外面には釉薬がかからない。37は須恵器壺である。外面にはヘラケズリ痕が明瞭で、内面は回転ナデ、底部外面は無調整である。4C段階の資料群である。

SK102　38・39は土師器皿Nである。38は小皿で復元口径は6.8cmである。この口径は通常の分布幅よりも小さい。最上層から出土した資料である。39は大皿で口径の復元はできない。口縁端部は外反し、4C段階の土師器皿Nに近しい。ほかに皿Aも出土しているが図化に耐えない。40は白磁壺の口縁部で、「へ」の字状に折れ曲がる。やや緑がかった釉調である。41は白磁で、隅丸方形の器種の角部にあたる。各辺とも折れて突起を作り出す。断面の屈曲部には内面から土を充填している。枕の角部か。実測に耐えない破片の資料も合わせ、SK102出土遺物の主体は4C段階ごろだが、最上層は6段階まで下がる可能性がある。

SE64　42～44は検出平面上では井戸枠の内外を分けられなかった最上層出土資料である。42・43は土師器皿Nで42は復元口径9.7cm、43は15.0cmとなる。44は灰釉系陶器の鉢で、胎土はやや粗く、灰白色の色調を呈する。片口部分が遺存している。

45～71は木製井戸枠が遺存していない上部も含めた井戸枠内出土である。45～52は土師器皿である。45は皿Ac、復元口径7.7cmで折り返しはゆるい。46～52は皿Nである。いずれも反転復元で、口径は9.5～13.8cm、うち3点が12cm台である。53は土師器の器種不明品である。胎土は土師器皿と比べて白く精良、口縁端部を玉縁状とする。54は白色土器の皿と思われるが、上部は遺存しない。底部は磨滅するが、かろうじて糸切り痕が視認できる。55は瓦器椀で、外面にもわずかにミガキが確認できる。56は東播系須恵器甕の胴部で、焼成は良好、ムラのない灰色を呈する。一方、57は木枠内から出土した東播系須恵器甕で、口縁端部から体部中央付近まで遺存するものの、焼成はやや甘く、表面は炭素が吸着し、黒色を呈する。58は灰釉系陶器の皿である。薄い灰色で胎土はやや粗い。59～61は灰釉系陶器の鉢である。60はやや赤みを呈し、焼成は堅緻、62は高台部分まで遺存している。62は輸入黄釉陶器の壺で底部際まで遺存する。63は龍泉窯系青磁の椀である。直線的な体部で外面は無文、内面は片彫りで不明文様を描く。64は青白磁椀の底部及び高台部である。65・66は白磁皿で、66は高台を有し、口縁部は外反する。67は白磁

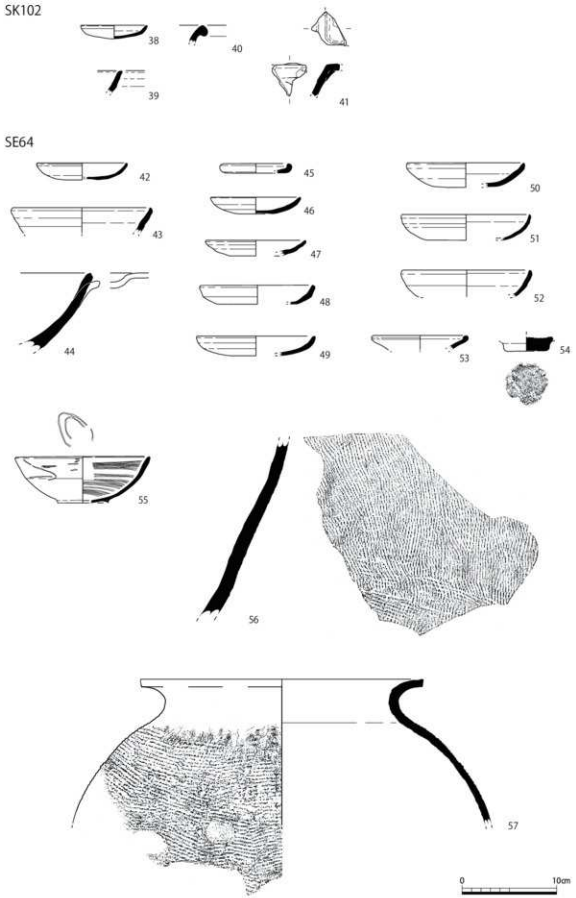


図20　出土遺物実測図２（１：４）

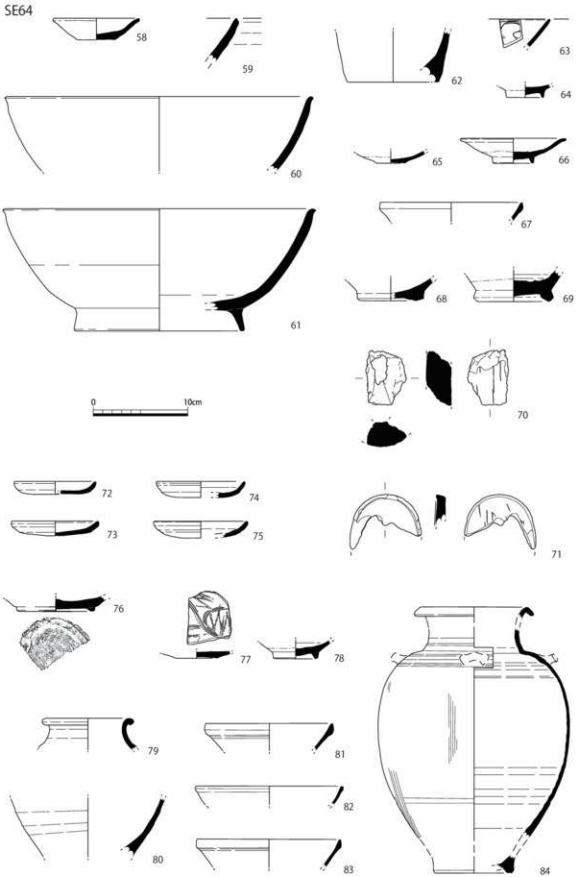


図21　出土遺物実測図３（１：４）

椀の玉縁状口縁部で復元口径は14.9cmである。68は同じく白磁椀で、低いケズリ出しの高台である。69は白磁壺の高台部であり、内面は凹凸が目立つ。70はふいごの羽口である。内外面とも部分的に元の面が遺存する。71は石製の硯で、外面底部は擦痕を認める。遺物内容から6A段階ごろの埋没であろう。

72～84は掘方出土資料である。72～75は土師器皿Nで、復元口径は8.6～10.0cmである。76は灰釉系陶器の椀である。薄い灰色で胎土はやや粗い。底部は糸切り痕が残り、高台は低い。77は同安窯系青磁の皿である。内面に櫛描文及び櫛点描文を施す。78は白磁椀で、高さのあるケズリ出し高台部分である。79は褐釉陶器の壺である。口縁部が屈曲し、遺存部下端がわずかに膨らむ。80は黄釉陶器の壺で体部下半の破片である。下端部は膨らんでおり、底部に極めて近いと思われる。81～83は白磁椀の口縁部である。82は玉縁がやや小さく、丸みを帯びた器形である。81・83は体部が直線的に伸びる。84は白磁四耳壺である。耳は遺存しない。体部には縦方向の櫛描文を有する。図上では口縁部及び高台部と体部を同一個体としたが、接合点はないため、別個体である可能性も捨てきれない。5B段階から6A段階にかかる資料群か。

SE12　85～88はSE12上部の焼土層及び炭化物層の出土遺物である。85は炭化物層の出土で土師器皿N、86は最上部の焼土から出土した土師器皿Nで、いずれも反転復元できるほどの大きさでは

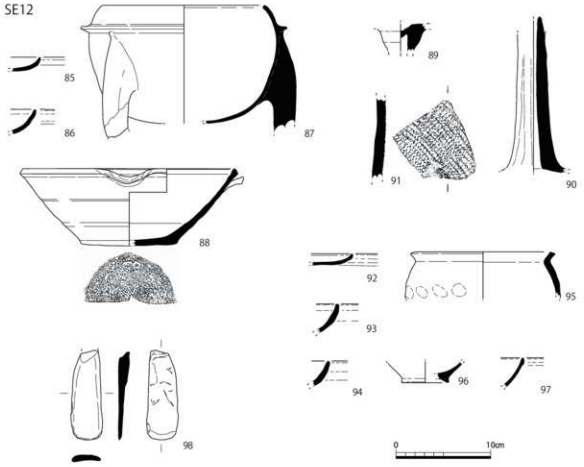


図22　出土遺物実測図4（1：4）

ない。87は焼土部から出土した瓦器三足付羽釜である。脚部は中ほどで欠損する。88は炭化物層から出土した東播系須恵器鉢である。口縁端部はわずかに肥厚する。

89～91は井戸枠内中層出土で、89は白色土器高杯の脚部と杯部の接合部である。杯部の見込みは凹ませる。90は白色土器高杯の脚部である。外面は縦方向に面を取るが、面の成形はやや甘い。91は須恵器甕の体部である。外面は格子目タタキで産地不詳、角度や天地については情報が少なく、断面図の正確性には欠ける。

92・93は木枠内出土で、いずれも土師器皿Nである。92は小皿、93は大皿と思われるが、法量復元はできない。

94～97は掘方出土である。94は土師器皿N、大皿だが法量復元はできない。95は土師器甕である。復元口径は15.3cmで、外面はユビオサエで調整する。96は灰釉系陶器の椀である。胎土は

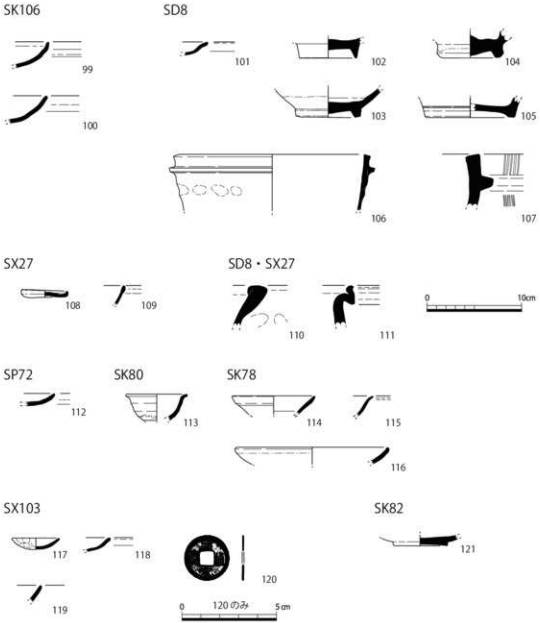


図23　出土遺物実測図５（１：４）・銭貨実測図（１：２）

精良で、三角形の高台を貼り付ける。底部は欠損しているため、底部調整は不明である。97は白磁椀である。緩やかに湾曲する体部に小さく玉縁とした口縁部が付く。口径は復元できない。98は曲物下部から出土した石器である。研磨により平滑で、裏面は未調整部分がある。先端は研磨で尖らせ、刃部とするか。混入であろう。

遺物量が少なく、時期の絞り込みには慎重にならざるを得ないが、最上層は6A～B段階、下部は5段階にさかのぼるとみる。

SK106　99・100は土師器皿Nである。いずれも大皿だが、口径の復元は難しい。口縁部の形態から5段階から6段階初頭ごろの土師器であろう。

SD8　101は土師器皿Nである。小皿で体部が「S」字状に屈曲する。口径復元はできないが、鎌倉時代後半に多い形状である。102は白磁椀の高台部である。ケズリ出しで高く伸びる。103は白磁椀の高台部で、見込みは施釉後、環状に釉を剥いでいる。104は白磁壺の高台部である。ケズリ出しで成形し、見込み中央部は上方に膨らむ。105は青白磁の梅瓶底部である。高台際から底部外面は露胎、内面遺存部はすべて施釉されている。106は瓦器羽釜である。直線的で外開きの体部に短い鍔が付く。107は滑石製石鍋である。わずかに内湾する体部に台形の鍔が付く。外面は器面調整のためのハツリ痕跡が明瞭である。土師器皿の出土数が少なく、時期の絞り込みが難しいが、7段階に埋没した遺構であろう。

SX27　108は土師器皿Scである。口径は5.0cmであり、口縁端部の折り返しは緩やか、底部はわずかながら押し上げられる。109は白磁椀の口縁部である。玉縁は小さい。遺物が少なく、時期の絞り込みが難しいが、6段階に帰属する可能性が高い。

SD8・SX27　掘削に際し、どちらの埋土から出土したかを弁別できなかった遺物をまとめた。110は瓦器盤の口縁部である。111は焼締陶器甕の口縁部である。常滑産でN字状に成形した上、端部は外反する。13世紀中ごろの資料群である。

SP72（柱穴列1）　112は土師器皿Nである。口径復元はできず、時期は絞り込みがたいが、6段階か。

SK80　113は施釉陶器の小椀である。釉薬は緑灰色に発色する。

SK78　114は土師器皿Shである。復元口径8.5cmである。115は白磁椀で端反口縁、胎土の色調等から近世以降の資料とみる。116は施釉陶器の皿である。黄橙色を呈し、近世以降の資料である。

SX103　117は土師器皿Nr、118は土師器皿Nである。118は中世前半ごろのものだが、117は江戸時代の資料である。119は施釉陶器の口縁部で緑色の釉薬が遺存範囲全体に施されている。唐津であり、近世の資料である。120は銅銭であり、「通」と「寶」は判読できるものの、他2文字が読めず、銭種は不明である。

SK82　121は緑釉陶器の高台部で、ケズリ出しの平高台である。釉薬は明るく薄い緑色を呈する。遺構そのものは近世の埋没だが、平安から鎌倉時代の遺物が出土している。

（3）瓦類

軒丸瓦　瓦１～４は宝相華文軒丸瓦である。瓦１はSP23、瓦２・３はSK78、瓦４はSK106から出土した。内区は中央の蓮子から４方向に花弁を配し、楕円形の間弁を置く。界線は花弁に対応して４か所で内側に凹み、外区は珠文を密に巡らせる。丸瓦部の凸面は縄タタキ、凹面は布目が観察できる。法住寺殿跡等で同文瓦が出土しており[1]、平安時代後期に位置付けられる。

瓦５～８は巴文軒丸瓦で、いずれも右巻きの三つ巴である。全てSK106から出土した。瓦５・６は瓦当面径が相対的に小さく、外区に珠文を巡らせる。巴の尾部は界線に接する。瓦７・８は瓦当面径が大きく、巴尾部は周縁に接しない。丸瓦部が遺存している瓦６・８の丸瓦部凸面はいずれも縄タタキ、凹面は布目で、瓦８の凸面には弧線と縦一文字を組み合わせたヘラ記号を認め、玉縁部には穿孔がある。平安時代後期から鎌倉時代前期の所産である。

軒平瓦　瓦９～14は唐草文軒平瓦である。全てSK78から出土した。瓦13は瓦当面の大部分が遺存している。いずれも瓦当部成形は折り曲げ技法により、山城産である。いずれの平瓦部凹面にも２本の弧線を対向させたヘラ記号が残る。凸面はユビオサエの痕跡が顕著である。瓦９は同遺構から同笵資料は出土していない。瓦10～12は同笵で、瓦当面上部に段を持つ。瓦11は平瓦部凹面のコビキ痕が顕著である。瓦13・14は同笵で、瓦当面上部が無段である。平安時代後期の所産である。

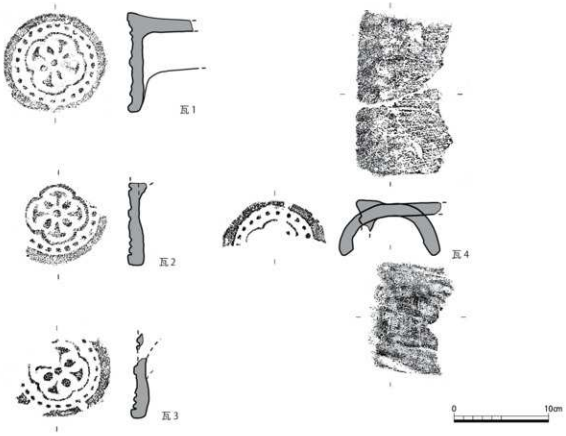


図24　出土軒丸瓦実測図（１：４）及び拓影１

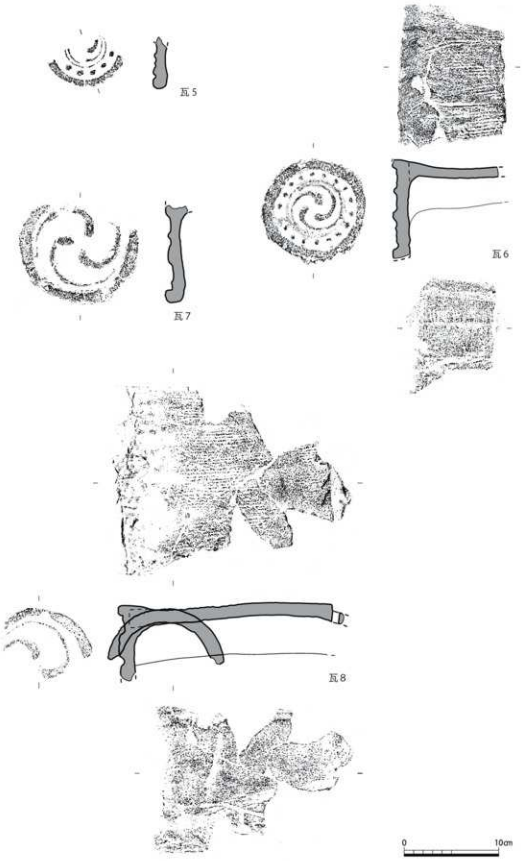


図25　出土軒丸瓦実測図（1：4）及び拓影2

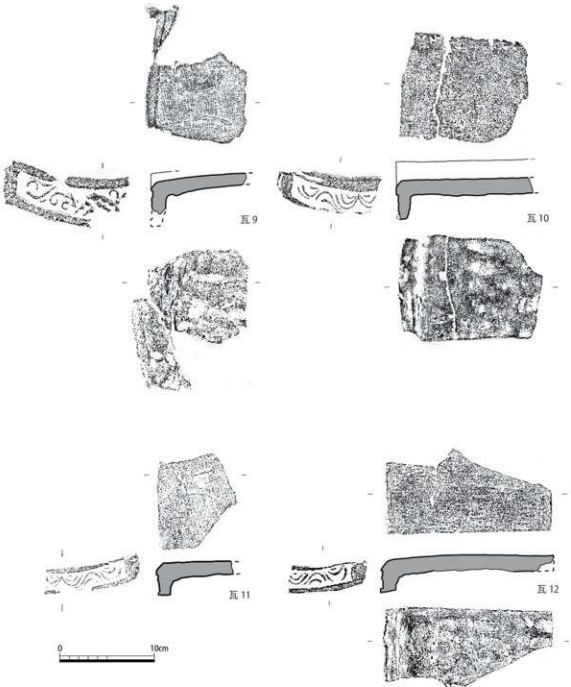


図26　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影1

瓦15～20は剣頭文軒平瓦である。瓦18・20は瓦当面の大部分が遺存している。いずれも瓦当部は折り曲げ技法で成形され、山城産である。瓦当面の上部は無段である。瓦15のみ第1面の掘り下げ中の出土、他はSK106から出土した。平瓦部がある程度遺存している資料（瓦16・17・19・20）の凹面には弧線と縦一文字を組み合わせたヘラ記号が残る。瓦15のみ剣頭文の1単位の幅が他の2点と比べて広い。また、瓦20は剣頭を3単位ずつ左右に配した中央に小さな菊文を4単位配している。

丸瓦　瓦21はSE101から出土した。凸面は大部分が剥離している。凹面は布目が残る。接地面が

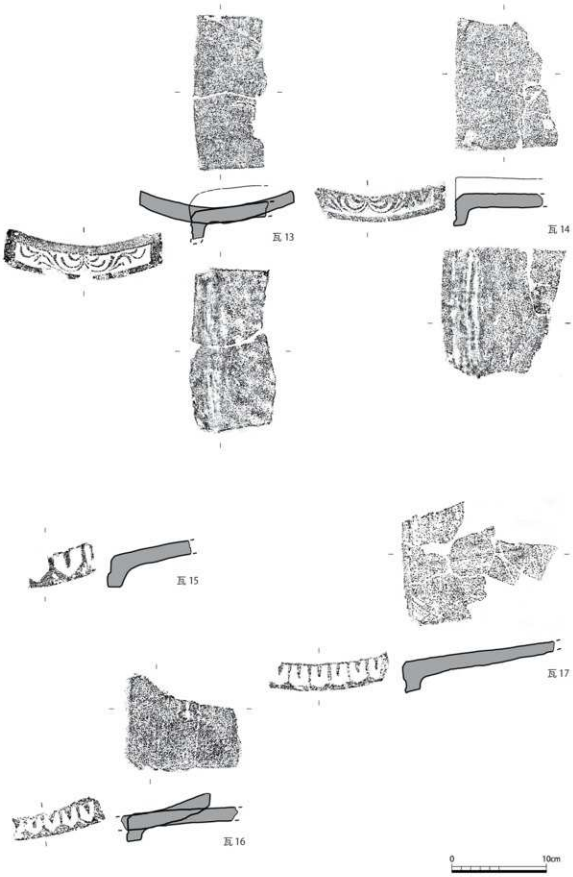


図27　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影2

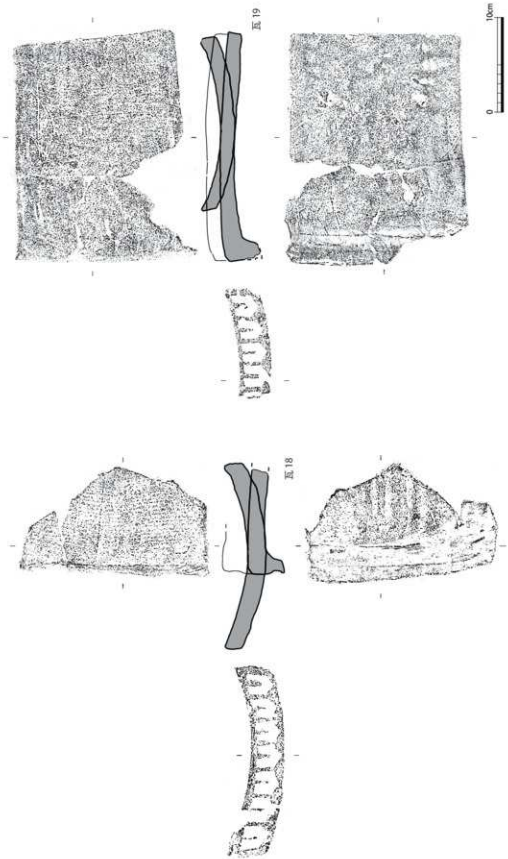


図28　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影3

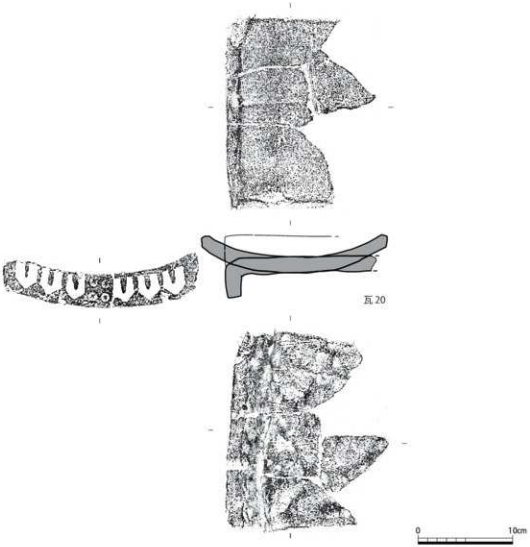


図29　出土軒平瓦実測図（1：4）及び拓影4

方形を呈する。瓦22・23はSK78から出土した。凸面はいずれも縄タタキ、凹面には布目が残る。凹面側のケズリ調整により、接地面側がとがった台形を呈する。瓦24・25はSK106から出土した。瓦24は玉縁部分に穿孔が残る。瓦24は接地面が方形を呈する一方、瓦25はケズリにより接地面側がとがった台形を呈する。

平瓦　瓦26はSE64から出土した。凹面には布目が残る。他の資料よりも相対的に厚い。瓦27・28はSK78から出土した。凹面のコビキ痕が顕著である。いずれも広端側の端面には円を八分割した刻印を押捺する。瓦29～32はSK106から出土した。凸面は縄タタキ、凹面は布目及びコビキ痕が残る。ただし瓦30は凸面にユビオサエが顕著であり、凹面に弧線と縦一文字を合わせたヘラ記号を付けている。広端側、狭端側の隅部がそれぞれ1か所以上遺存している資料、すなわち平瓦であることが明らかな資料にはユビオサエ及びヘラ記号は観察できず、軒平瓦に顕著な特徴であったため、瓦30は軒平瓦の平瓦部である可能性が高い。瓦31と瓦32には広端側端面にひし形を四分割した刻印を押捺する。瓦33は塼である。SE102から出土した。調整痕は看取できなかった。

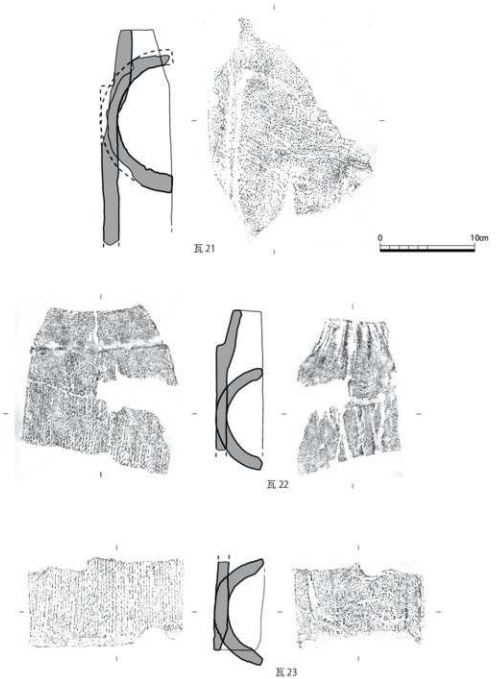


図30　出土丸瓦実測図（1：4）及び拓影1

なお、SK78から出土した瓦は接合前破片数で軒丸瓦が3点、軒平瓦が13点、丸瓦は破片が34点、平瓦が破片で103点であった（表4）。このうち、丸瓦は玉縁が7個体分、先端部が2個体分であった。また、平瓦は隅部が45点であった。SK78出土軒瓦は宝相華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の組み合わせである。

SK106から出土した瓦は接合前破片数で軒丸瓦が22点、軒平瓦が17点、丸瓦は破片が210点、平瓦が破片で703点であった（表5）。このうち、丸瓦の玉縁部は34個体分、先端部は15個体分であった。平瓦の隅部は139点であった。SK106出土軒瓦は宝相華文軒丸瓦、巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦の組み合わせである。

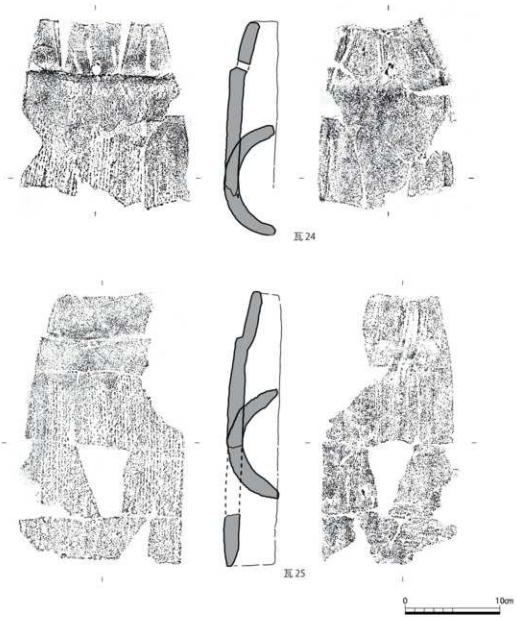


図31　出土丸瓦実測図（1：4）及び拓影2

表4　SK78出土丸瓦破片数

軒丸		4	2.6%
軒平		14	9.0%
丸		34	21.9%
うち	玉縁	7	
	先端	2	
平		103	66.5%
うち	隅部	45	
合計破片数		155	

表5　SK106出土丸瓦破片数

軒丸		22	2.3%
軒平		17	1.8%
丸		210	22.1%
うち	玉縁	34	
	先端	15	
平		703	73.8%
うち	隅部	139	
合計破片数		952	

註

1）財団法人京都市埋蔵文化財研究所『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-10、2013年。

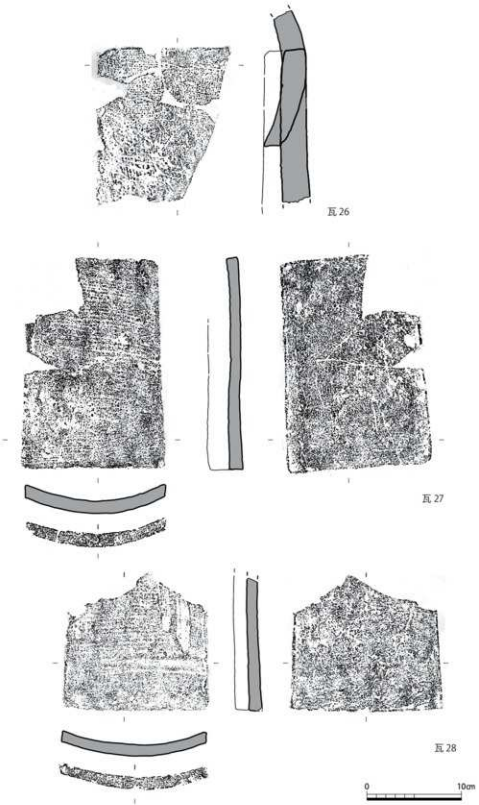


図32　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影1

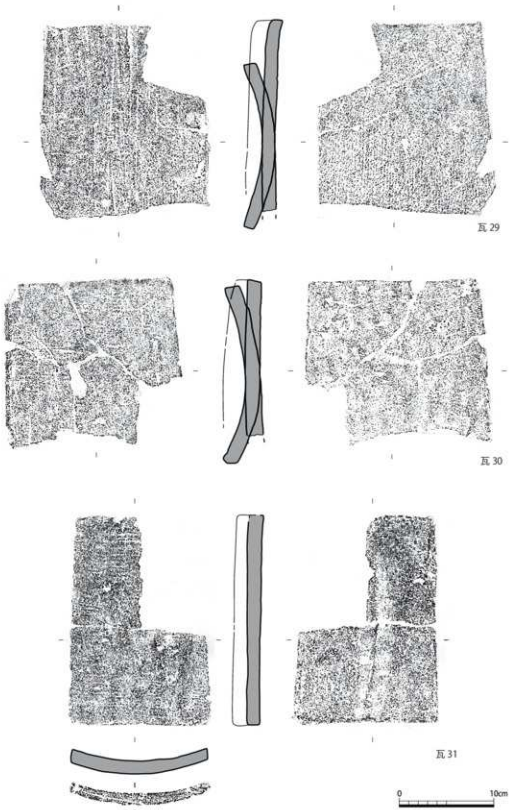


図33　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影2

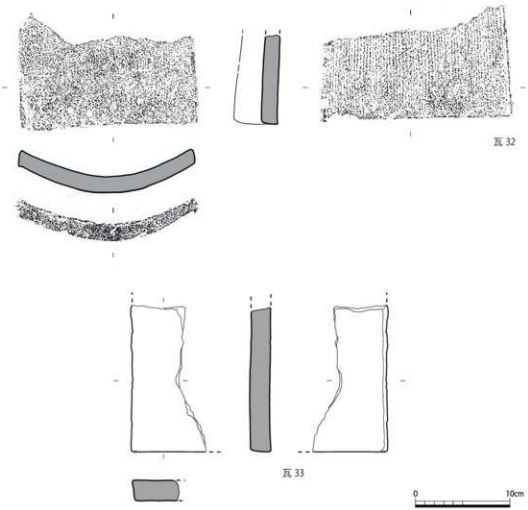


図34　出土平瓦実測図（1：4）及び拓影3・出土塼実測図（1：4）

（4）木製品

木1・2はSE64の井戸枠である。木2の南枠は検出時点で3部材に分かれていたが、本来は1つの木材であろう。北枠は厚み8～10cm程度、南枠は厚み6～8cm程度である。

木3～6はSE12の井戸枠で底部付近に遺存していた。いずれも長さ80～85cmで、高さは9cm程度、厚みは1.5～3.0cm程度の薄く長い板材である。

木7はSE12から出土した用途不明木製品である。2つの球体がつながった形状を呈している。直径2.2cm、高さは3.7cmである。

木8～11はSK106底部から出土した板材である。木8・9が木10・11に重なった状態で出土した。厚みはほぼ均質で3.0cm程度、長さ・幅はそれぞれ異なり、木8が長さ32cm、幅15cm、木9が長さ36cm、幅20cm、木10が長さ59cm、幅11cm、木11が長さ60cm、幅26cmである。木10・11はほぼ全体が遺存していると推測できる一方、木8・9は腐食により欠損する。

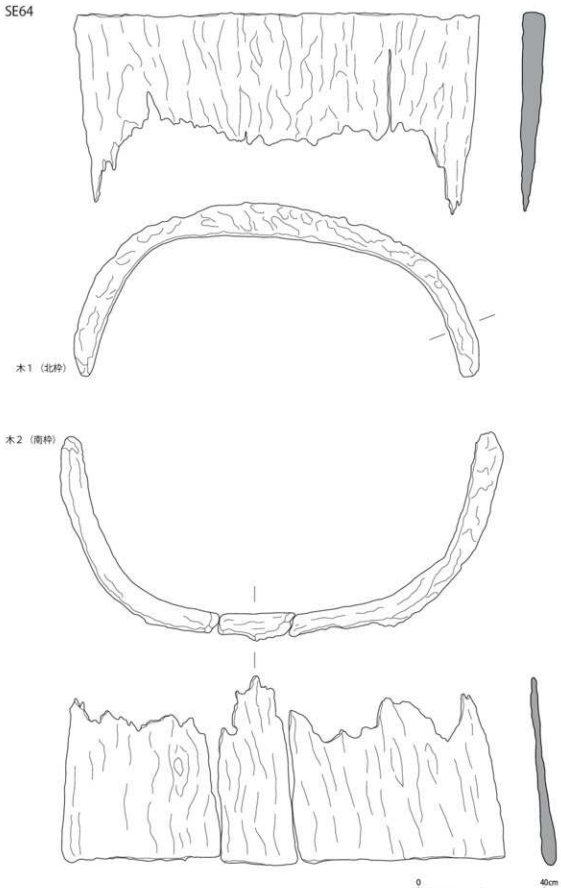


図35　SE64出土井戸枠実測図（1：12）

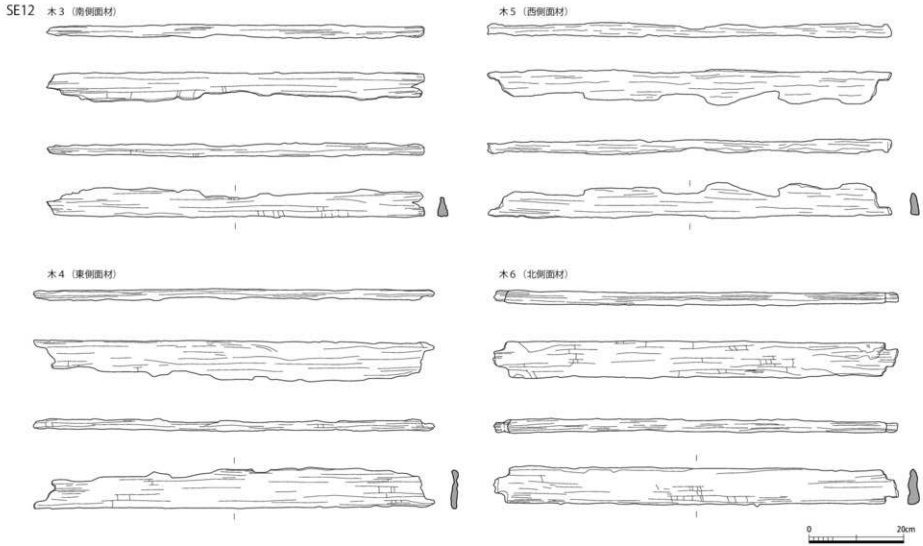


図36　SE12出土井戸枠実測図（1：8）

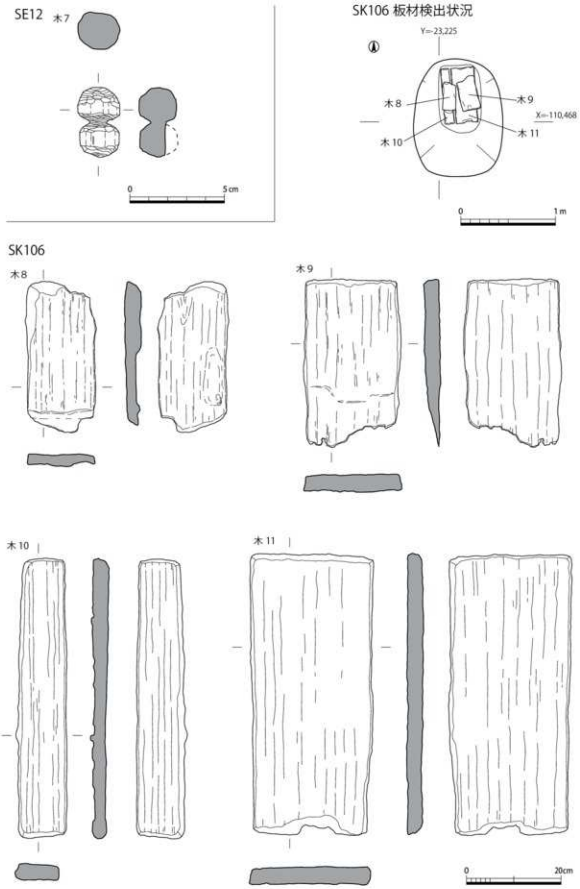


図37　SE12出土木製品実測図（1：2）・SK106出土木製品実測図（1：8）

5．まとめ

今回の発掘調査では、主に平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。調査成果を時期ごとにまとめておきたい。

平安時代前期　この時期の遺構には方形土坑のSK76がある。遺構の性格は不詳で、同時期の遺構は他になく、土地利用の状況を詳らかにすることができない。文献記録上では、当町に光孝天皇の皇子、是忠親王の御所である「南院」が所在したとされており、これと関連する可能性もある。

平安時代中・後期　SK76以降で最も古いと考えられる遺構はSE101・SE25であり、4C段階に帰属する。平安前期以降、低調だった土地利用はこの時期に再開される。これ以降、SK102やSE64、SE12と平安時代後期の遺構は複数検出しており、継続的な土地利用を認める。遺構の帰属時期は新しいが、SK78やSK106からは平安時代後期の瓦が出土しており、この時期に瓦を用いた施設があった可能性が高い。

鎌倉時代　壬生大路西築地内溝と目されるSD8は鎌倉時代に埋没している。これに先立つ整地SX27も鎌倉時代の遺物が出土しており、整地と宅地の整備をこの時期におこなっていることが分かる。柱穴列１は平安時代末から鎌倉時代初頭、それと重複した位置にある柱穴列２は鎌倉時代中期の造り替えであり、前代に引き続いて活発な土地利用をおこなっていた。ただし、鎌倉時代に埋没した井戸は検出しておらず、調査区内に複数の井戸を検出した平安時代後期との差は顕著である。宅地の規模など、土地の利用方法がこの間に変化した可能性もあろう。

鎌倉時代後期以降は顕著な遺構がなくなる。遺構面上部が削平されている影響もあると思われるが、井戸や溝などの深い遺構の痕跡もなく、土地利用が再び低調になったとみて大過ないであろう。

江戸時代以降　土取穴SX103を除いて顕著な遺構はない。鎌倉時代の瓦が出土するSK78もあり、土地の再利用に伴い、付近の古瓦を集積したものか。耕作に伴う溝を複数条検出しており、耕作地として利用されたのであろう。大正期には京都市電壬生車庫が設置され、市電廃止後、その広大な敷地には壬生坊城第２団地が設置された。調査区内では電柱跡と思われる撹乱を複数検出し、調査区南西部にはレンガを用いた建物基礎を検出した。これらは壬生車庫に伴う遺構の可能性が高い。

周辺調査との比較　周辺の調査では平安時代前期の遺構を複数地点で検出しているが、平安時代中期には遺構数が激減することが分かっている。図７・表１-（以下略）調査６や調査７では３段階後半から４段階の遺物群がほとんど出土していない。一方、今回の調査区に近接する調査10では３段階は希薄だが、４段階後半から遺構を検出している。今回の調査区の状況は調査10により近く、同じ左京四条一坊内でも再開発には微妙な時期差を認める。一方で、今回調査区では鎌倉時代には整地と築地内溝の開削をおこなっている。これが新規に施工したものか、平安時代にすでに施工されていた内溝の掘り直しなのかは、今回の調査成果では不明だが、整地を伴い、井戸の配置を変更していることから、鎌倉時代初頭の整備も相応の規模であった。平安時代後期に現在の千本

図38　調査10全体図と今回の調査区（1：2,000）

通沿い一帯で再開発が進んだことは左京四条一坊に隣接した地区の調査でも確認しているが、一帯が統一的な都市計画のもとに再開発されたのか、徐々に開発が進んだのかは、個々の調査内容を精査して検討する必要があろう。

改めて調査10の調査成果と合わせて付近一帯の土地利用を概観したい。調査10は調査時に座標値を求めておらず、報告書図面の敷地境界を現在の都市計画図に合わせて、各調査区を図38に配置した。したがって、これらは多少のズレが生じている可能性がある。また、各井戸の記号については原報告から少し拡大して配置した。調査10では壬生大路西側溝を検出しているが、今回の調査で検出した壬生大路築地内溝の延長線上で溝は検出していない。調査10では南側ほど後世の削平の影響が大きいことが報告されており、削平されていた可能性もある。報告されている井戸は12基あり、平安時代前期から戦国時代に及ぶ。平安時代の井戸は六町・七町の宅地範囲に収まるが、鎌倉時代には錦小路上に井戸が築かれ、室町時代以降には壬生大路上に井戸が築かれる。時代

を経るごとに条坊道路にも居住域が進出していくことが井戸の分布から明確である。今回の調査区では鎌倉時代前期に築地内溝を施工しており、この時期に改めて道路を意識させる行為をおこなっているものの、錦小路上の井戸をみるに、その効果はあまり長続きしなかったようだ。戦国時代の幅3.5mの溝も検出しており、井戸も合わせ、この時期の土地利用も比較的活発であるが、今回調査区では同時期の遺構は検出していない。

遺物に目を向けると、調査10では平安時代前期から鎌倉時代の瓦が出土している。巴文軒丸瓦や剣頭文軒平瓦は今回調査区と共通してた出土資料である。一方で宝相華文軒丸瓦や今回調査区と同文の唐草文軒平瓦は報告されていない。また、調査10で出土した人形や木簡などの多量の木製品は、今回調査区では確認できなかった。SE12から出土した木７（用途不明木製品）のような小型の製品でも遺存していることから、埋没環境による木製品の遺存度合いが両地点間で大きく異なるとは考え難く、そもそもの埋没木製品量に差があると考えるべきであろう。

以上のように、近接する２地点間でも多数の違いを認める。平安京では個々の地点の居住者ごとに近接地点でも土地利用のあり方が大きく変わることが多い。個々の調査成果を丁寧に分析し、比較検討を続けていく必要がある。

附章１　平安京左京四条一坊五町出土木材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

京都府京都市の平安京左京四条一坊五町で出土した木材の樹種同定を行った。

２．試料と方法

試料は、井戸跡SE64の井戸枠板（木１・２）、土坑SK106の底部から出土した木製品（木８～11）、SE12曲物内から出土したサイコロ状木製品（木７）の、計３点である。遺構の時期は、いずれも平安時代と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、井戸跡SE64の井戸枠板は広葉樹のクスノキ、土坑SK106の木製品は針葉樹のヒノキ、SE12曲物内のサイコロ状木製品は針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。同定結果を附表１に示す。

附表１　平安京左京四条一坊五町出土木材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	出土位置	器種	樹種	木取り	時期
4	SE64	木枠　北西	井戸枠板	クスノキ	割り貫き	平安時代
6	SK106	底部　上東	木製品	ヒノキ	追柾目	平安時代
15	SE12	曲物内	サイコロ状木製品	マツ属複維管束亜属	芯持削出	平安時代

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

（1）マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon マツ科 附章図版１ 1a-1c(No.15)

仮道管と垂直及び水平樹脂道、放射柔細胞及び放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

（2）ヒノキ Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 附章図版１ 2a-2c(No.6)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行

は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(3) クスノキ Cinnamomum camphora (L.) J.Presl クスノキ科 附章図版1 3a-3c(No.4)

年輪のはじめに中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在し、晩材部にかけて道管の径が減少する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～2列となる。また、放射組織や木部繊維には油細胞がみられる。

クスノキは暖帯から亜熱帯へかけての本州中南部、四国、九州に分布する常緑高木の広葉樹である。材の硬さはやや軽軟であり、切削加工は容易である。また、耐朽性及び耐虫性がきわめて高い。

4. 考察

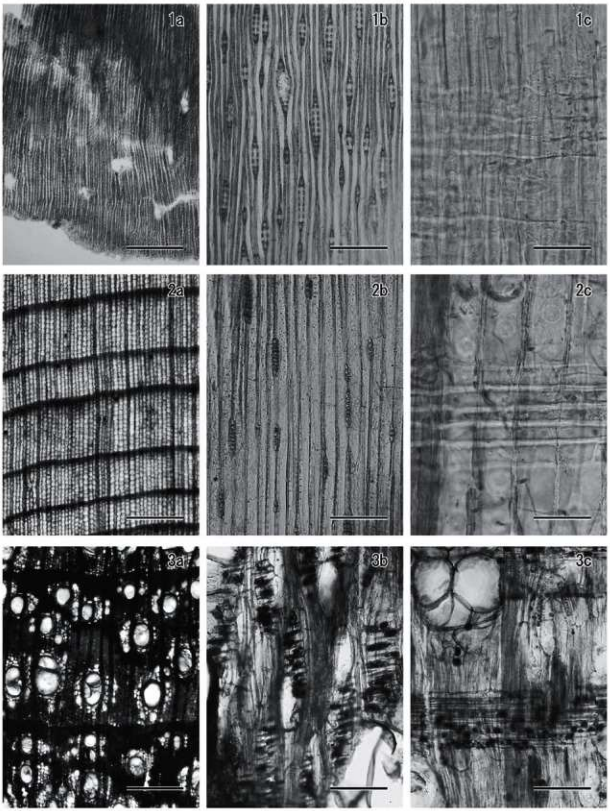
刳り貫きの井戸枠板はクスノキ、板状の木製品はヒノキ、サイコロ状木製品はマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属とヒノキは木理通直でまっすぐに生育する、加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。そしてクスノキは、やや軽軟で加工性が良く、耐朽性及び耐虫性の高い樹種である（伊東ほか，2011）。

平安時代ごろの井戸跡でクスノキ製の刳り貫きの井戸枠は、静岡県の梶小北遺跡や愛知県の市道遺跡、三重県の堀町遺跡などでも確認されている（伊東・山田編，2012）。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．



附章図版１　平安京左京四条一坊五町出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c.マツ属複維管束亜属（No.15）、2a-2c.ヒノキ（No.6）、3a-3c.クスノキ（No.4）
a：横断面（スケール=500μm）、b：接線断面（スケール=200μm）、c：放射断面（スケール=-2：50μm・3：200μm）

附章２　平安京左京四条一坊五町出土の動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

平安京左京四条一坊五町の発掘調査において出土した動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、平安時代の溝跡SD8から出土した動物骨である。土ごと取り上げられていたため、現状のまま肉眼で観察し、標本との比較により分類群を同定した。

3. 結果

同定結果を表１に示した。試料は、ウマの左下顎臼歯列である。臼歯の頰側を上にして出土しており、第２前臼歯の近心側の一部と第３後臼歯の頰側の一部を欠損している。第４前臼歯の歯冠高は約47mmであり、ウマの歯冠高と年齢の相関表（松井，2008）によれば、推定年齢は７～８才ほどと推定される。

附表２　平安京左京四条一坊五町出土の動物遺体同定結果

遺構	分類群	部位	左右	備考
SD8（溝）	ウマ	下顎臼歯列	左	第４前臼歯歯冠高：約46.7mm

引用文献

松井 章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会．

附章図版２　壬生坊城町出土の動物遺体

１．ウマ左下顎臼歯列（左から第２前臼歯、第３前臼歯、第４前臼歯、第１後臼歯、第２後臼歯、第３後臼歯）